高槻市文化財年報

平成13・14年度

Ⅰ　埋蔵文化財の調査 …… 1

1．平成13・14年度の調査

2．調査の概要

安満山古墳群の調査（3）　西村　恵祥　高橋　公一　宮崎　康雄

今城塚古墳第５・６次規模確認調査　宮崎　康雄

高槻城二の丸跡の調査　西村　恵祥

Ⅱ　しろあと歴史館 …… 30

Ⅲ　文化財保護啓発事業 …… 34

Ⅳ　指定文化財 …… 41

Ⅴ　資料紹介 …… 44

今城塚古墳外濠採集の子持勾玉　西村　恵祥

Ⅵ　報　　告 …… 46

岡本山古墳測量調査　高橋　公一

月見町所在「真上窯跡」の発見

２００３年９月

高槻市教育委員会

高槻市文化財年報

平成13·14年度

Ⅰ　埋蔵文化財の調査

1．平成13・14年度の調査

平成13年度の土木工事等に伴う埋蔵文化財調査の届出･通知件数は繰越分を含めて87件で、このうち23遺跡63件について発掘調査を実施した。平成14年度においては、「大阪府における開発事業等に伴う埋蔵文化財の取り扱い基準」に沿って、事務手続きの見直しをおこない、届出の内容により、発掘調査と工事立会を区別した。このため届出・通知件数（繰越分含む）73件のうち19遺跡について、発掘調査20件（大阪府調査の１件を含む）、工事立会45件をそれぞれ実施した（表１～４参照）。

主要な調査については次節「調査の概要」に収録したが、13・14年度の調査について概観する。

嶋上郡衙跡では継続的に小規模な調査をおこなったが、郡衙関連の明確な遺構は検出していない。

上土室遺跡は昭和62年の試掘調査で古代から中世の墓地であることが指摘されていたが、宅地造成工事に伴い発掘調査を実施した（2002－Ａ調査）。その結果鎌倉～室町時代の墓地であることが判明し、検出した埋葬施設の総数は1463基にのぼった。主な埋葬施設には土坑墓・集石土坑墓・荼毘墓等があり、14年度末現在調査継続中である。

中城遺跡では、中世に属する溝・土坑など明確な遺構を検出した（2001－Ｃ調査）。これまでの調査では、遺構面が削平された状況を確認していたが、これらの遺構の検出によって、中城遺跡の実態にせまる端緒を得たといえよう。

闘鶏山古墳は、これまで詳細が不明であったが、13年度に開発計画に伴って試掘調査を実施したところ、未盗掘の竪穴式石室が２基存在することが判明した。そして東側の第１主体内部には銅鏡をはじめとした副葬品等が、西寄りに位置する第２主体には木棺が遺存していることがそれぞれ確認された。これを受けて14年度には確認調査を実施し、前方部２段、後円部３段の段築を持つ全長86.4mの前方後円墳であることが明らかとなり、４世紀前半の築造と推定された。闘鶏山古墳は淀川北岸に展開する三島古墳群成立の段階において重要な位置を占めていたとみることができ、きわめて注目される古墳であるとして、平成14年12月19日付けで史跡に指定された（本書「Ⅳ　指定文化財」参照）。

史跡今城塚古墳では、第５次及び第６次規模確認調査を実施し、北側内堤において形象埴輪群が検出され、埴輪祭祀区として機能していたことが明らかとなった（次節参照）。

高槻城跡では、三の丸跡北郭地区で地下室（むろ）状遺構を検出した（2001－５調査、高槻市文化財調査概要ＸＸⅧ「嶋上遺跡群26」参照）。この地下室状遺構は、木製桝形貯蔵穴と呼ばれるもので、方形を呈する掘形の底と壁に短冊状の板を貼って底部と壁面を形成している。木製桝形部分の規模は1.8m×1.9m、壁面の板２段分を検出し、深さは約0.3mを測るが、上部構造と当初の深さは不明である。江戸期に属するとみられ、城内の生活にかかわる貯蔵施設が検出された意義は大きい。

また、公園整備に伴う調査（2002－Ｅ調査）では、二の丸の正門跡・橋脚等を検出し、はじめて二の丸東辺が確定できた。さらに三の丸北郭西南隅部が検出され、三の丸北郭と厩郭を結ぶ木橋の橋脚が出土した（次節参照）。

安満山古墳群（2001－Ａ調査）では、公園墓地整備に伴って３基の古墳を調査した。このうちの２基は、流土堆積によって完全に埋没しており、今後は地表に現れている痕跡だけでなく、斜面下方の傾斜変換点、あるいは緩斜面においても古墳の存在に留意する必要があろう（次節参照）。

No.	遺跡名(地区)	所　在　地	届　出　者	用　途	面積(m²)
1	嶋上郡衙跡(2001-A)	郡家新町163-48	室田正夫	個人住宅	61.32
2	嶋上郡衙跡(2001-B)	川西町一丁目955-14、955-6	(株)マツバラ	分譲住宅	359.83
3	嶋上郡衙跡(2001-3)	川西町一丁目954-8	木下明浩	個人住宅	43.40
4	嶋上郡衙跡(2001-C)	川西町一丁目953-13	大城工務店	分譲住宅	54.47
5	嶋上郡衙跡(2001-5)	郡家新町155-2	松岡建設(株)	分譲住宅	1262.80
6	嶋上郡衙跡(2001-D)	川西町一丁目23番地地先	高槻市長	下水道敷設	150.00
7	嶋上郡衙跡(2001-2)	清福寺町918-8	北川　泉	個人住宅	52.25
8	嶋上郡衙跡(2001-1)	郡家本町755-1	久保田明良・充功	個人住宅	187.40
9	嶋上郡衙跡(2001-E)	郡家本町544-3の一部	大伸開発株式会社	分譲住宅	109.52
10	嶋上郡衙跡(2001-F)	郡家本町544-3の一部	大伸開発株式会社	分譲住宅	71.05
11	嶋上郡衙跡(2001-G)	郡家本町544-3の一部	大伸開発株式会社	分譲住宅	71.05
12	嶋上郡衙跡(2001-H)	川西町一丁目1011-2の一部	大伸開発株式会社	分譲住宅	200.33
13	嶋上郡衙跡(2001-I)	川西町一丁目1011-2の一部	大伸開発株式会社	分譲住宅	100.36
14	嶋上郡衙跡(2001-4)	川西町一丁目957、957-1	奥山　進・一美	個人住宅	290.40
15	嶋上郡衙跡(2001-J)	郡家新町395-47	山口太一	個人住宅	83.72
16	嶋上郡衙跡(2001-K)	川西町一丁目959-9、956-7	福田祐三・福田博子	個人住宅	59.68
17	嶋上郡衙跡(2001-L)	川西町一丁目1086-26	吉村将史・吉村二郎	個人住宅	70.05
18	嶋上郡衙跡(2001-M)	清福寺町758-3	谷　秀樹・谷由美子	個人住宅	266.55
19	史跡 嶋上郡衙跡(2001-N)	清福寺町986-1他	高槻市教育委員会	管理用外柵	L=63.5m
20	史跡 嶋上郡衙跡(2001-O)	郡家新町274	下村忠男	農小屋	54.00
21	史跡 嶋上郡衙跡(2001-P)	郡家新町273	岩本義一	電気引込柱	0.09
22	史跡 嶋上郡衙跡(2001-Q)	清福寺町911地先	高槻市長	舗装補修	57.60
23	史跡 嶋上郡衙跡(2001-R)	清福寺町914地先	高槻市長	道路舗装改修	325.50
24	闘鶏山古墳(試掘調査)	氷室町六丁目1-30	㈱ハシモトコーポレーション	試掘調査	60.00
25	中城遺跡(2001-A)	昭和台町二丁目154の一部	宏友建設	分譲住宅	177.92
26	中城遺跡(2001-B)	昭和台町二丁目154の一部	宏友建設	分譲住宅	177.62
27	中城遺跡(2001-1)	北昭和台町313-4	岡崎勝正	個人住宅	228.27
28	中城遺跡(2001-C)	昭和台町二丁目120	井上好一	個人住宅	275.47
29	中城遺跡(2001-D)	北昭和台町315-9の一部	福山　悟	個人住宅	82.63
30	中城遺跡(2001-E)	北昭和台町315-9の一部	細田博幸・細田房美	個人住宅	89.11
31	富田遺跡(2001-1)	富田町六丁目2833の一部	寺川富雄	個人住宅	94.42
32	岡本山古墓群(2001-A)	岡本町51番地地先	高槻市下水道室	下水道敷設	50.00
33	史跡 今城塚古墳(2001-1)	郡家新町	高槻市教育委員会	規模確認調査	680.00
34	史跡 今城塚古墳(2001-A)	郡家新町273	高槻市教育委員会	管理用扉	
35	郡家今城遺跡(2001-1)	氷室町一丁目769-6	多田敬二	個人住宅	103.34
36	郡家今城遺跡(2001-A)	氷室町一丁目771-2	矢田貞次	個人住宅	180.92
37	宮田遺跡(2001-A)	宮田町三丁目87-3他	㈱中岡建設	分譲住宅	221.64
38	津之江南遺跡(2001-A)	津之江北町237、238、241	ヤマモトハウジング	分譲住宅	666.00
39	宮之川原遺跡(2001-1)	宮之川原五丁目512-2	小泉正行	個人住宅	68.66
40	宮之川原遺跡(2001-2)	宮之川原五丁目509-2	林　政義	個人住宅	76.23
41	宮之川原遺跡(2001-3)	宮之川原五丁目505-56	中川　清	個人住宅	98.40
42	大蔵司遺跡(2001-A)	大蔵司二丁目206の一部	古藤芳次	店舗建設	497.73
43	田能北遺跡(2001-A)	大字田能小字宮ノ前12-1他	友遊福祉会	福祉施設	1337.37
44	田能南遺跡(2001-1)	大字田能小字中条39-2	上中清隆	個人住宅	115.10
45	古曽部・芝谷遺跡(2001-A)	真上町五丁目59-1他	総合住販株式会社	分譲住宅	2997.51
46	伝　秀吉陣跡(2001-A)	芥川町一丁目地内	再開発組合	再開発	60.00
47	芥川遺跡(2001-A)	殿町55-1、55-3、55-6	吉田　修	共同住宅	1980.00

表1　平成13年度調査地一覧(1)

種別	担当者	調査期間	調査内容
調査	木曽	13.4.16	地表下1.4mで青灰色粘土の地山確認　遺構・遺物無し
調査	木曽	13.4.26	地表下1.7mで暗黄褐色粘土の地山確認　遺構・遺物無し
調査	木曽	13.5.28～29	※地表下1.65mで暗黄褐色土の地山確認　遺構・遺物無し
調査	鐘ヶ江	13.5.31	地表下1.7mで包含層（厚さ0.4m）検出　遺構無し
調査	橋本	13.6.21～27	※地表下0.9mで暗緑色砂質土の地山確認　遺構・遺物無し
調査	橋本	13.7.9～31	遺構面に達せず
調査	木曽	13.9.3	※地表下1.75mで暗黄褐色土の地山確認　遺構・遺物無し
調査	木曽	13.9.25～28	※地表下1.3mで黄灰褐色礫の地山確認　遺構・遺物無し
調査	木曽	13.11.12	地表下0.65mで黄褐色粘土の地山確認　遺構・遺物無し
調査	木曽	13.11.13	地表下0.52mで黄褐色粘土の地山確認　遺構・遺物無し
調査	木曽	13.11.14	地表下0.6mで黄褐色粘土の地山確認　遺構・遺物無し
調査	高橋	13.12.4	地表下0.8mで青灰色砂礫の地山確認　遺構・遺物無し
調査	高橋	13.12.4	地表下0.7～0.8mで青灰色砂礫の地山確認　落ち込み等検出　遺物無し
調査	宮崎	14.1.8	※地表下0.9で淡黄灰色粘質土の地山確認　遺構・遺物無し
調査	宮崎	14.1.23	地表下1.9mで暗黄灰色粘土の地山確認　遺構・遺物無し
調査	木曽	14.2.18～21	地表下2.2mで暗黄色土の地山確認　遺構・遺物無し
調査	木曽	14.3.11	地表下1.6mで暗黄褐色礫土の地山確認　遺構・遺物無し
調査	橋本	14.3.12～14	地表下0.4mで淡褐色土の地山確認　遺構・遺物無し
調査	橋本	13.5.31	史跡現状変更　遺構面に達せず
調査	橋本	13.9.9	史跡現状変更　遺構面に達せず
調査	橋本	13.10.4	史跡現状変更　遺構面に達せず
調査	橋本	13.12.19	史跡現状変更　遺構面に達せず
調査	橋本	13.12.19	史跡現状変更　遺構面に達せず
調査	橋本	14.1.17～3.5	竪穴式石室2基確認　（平成14年度に確認調査実施）
調査	木曽	13.5.21	地表下0.43mで暗黄褐色土の地山確認　遺構・遺物無し
調査	木曽	13.5.21	地表下0.4mで暗黄褐色土の地山確認　遺構・遺物無し
調査	橋本	13.6.20	※地表下1.2mで淡黄灰色土の地山確認　東播系須恵器細片出土　遺構無し
調査	西村	14.2.25～28	中世の溝（2.5m）・土坑・ピット等検出　瓦器・土師器等出土
調査	西村	14.3.4	地表下1.7mで黄灰褐色シルトの地山確認　堆積土から池と推定　遺物無し
調査	西村	14.3.4	地表下1.7mまで堆積土検出　堆積土から池と推定　地山未確認　遺物無し
調査	木曽	13.9.18～21	※地表下0.4～0.5mで黄褐色礫土の地山確認　遺構・遺物無し
調査	木曽	14.1.7～3.31	遺構面に達せず
調査	宮崎	13.6.25～11.30	史跡現状変更　北側の内堤・外濠の確認調査（第5次）　**本書掲載**
調査	橋本	14.3.12	史跡現状変更　遺構面に達せず
調査	木曽	13.8.22～24	※地表下1.0mで暗黄褐色礫の地山確認　遺構・遺物無し
調査	高橋	14.2.22	律令期の柱穴・ピット・溝等検出　土師器片出土
調査	木曽	13.9.20	地表下0.75mで暗黄褐色粘土の地山確認　遺構・遺物無し
調査	木曽	13.6.7～19	ピット、溝等検出　土師器細片出土
調査	木曽	13.6.28	※地表下1.4mで暗黄褐色礫の地山確認　遺構・遺物無し
調査	木曽	13.8.1～3	※地表下1.5mで暗黄褐色礫の地山確認　遺構・遺物無し
調査	高橋	13.11.22～30	※地表下2.15mで淡青灰色粘土の地山確認　河川堆積の包含層検出　遺構無し
調査	高橋	13.12.17	地表下1.4mで褐灰色砂礫の河川堆積層確認　堆積層から土師器細片出土
調査	木曽	13.10.24	地表下0.43mで灰褐色礫土の地山確認　遺構・遺物無し
調査	木曽	13.8.27～31	※地表下0.3mで暗赤褐色礫の地山確認　遺構・遺物無し
調査	宮崎	13.10.19	地表下2.0mで黄灰色粘質土の地山確認　遺構・遺物無し
調査	橋本	14.3.22	地表下約0.4mで旧耕土を検出　遺構・遺物無し
調査	宮崎	13.12.20	地表下約1.0mで褐色礫の地山検出　遺構・遺物無し

No.	遺跡名(地区)	所　在　地	届　出　者	用　途	面積(m²)
48	高槻城跡(2001-A)	野見町1244-9	蔵田志郎	個人住宅	57.85
49	高槻城跡(2001-1)	城内町1001-1	坂本俊夫	個人住宅	78.90
50	高槻城跡(2001-2)	野見町1205	法橋かね子	個人住宅	175.98
51	高槻城跡(2001-B)	出丸町992-19	(株)土屋	分譲住宅	64.64
52	高槻城跡(2001-3)	野見町443-16	樽谷好次	個人住宅	81.70
53	高槻城跡(2001-4)	八幡町1056他	薮　重彦他	個人住宅	1165.14
54	高槻城跡(2001-5)	野見町1500-1	池長　潤	信徒館･司祭館	2148.74
55	高槻城跡(2001-6)	野見町1234-4	青木淳一	個人住宅	69.83
56	高槻城跡(2001-C)	野見町422-1、422-1、422-3	郡　邦辰	共同住宅	946.21
57	安満山古墳群(2001-A)	安満御所の町1325-1他	高槻市	墓地造成	98880.00
58	安満遺跡(2001-A)	八丁畷町154-1他	関西電力株式会社	変電所施設整備	12727.65
59	史跡 安満遺跡(2001-B)	八丁畷町989-1他	高槻市教育委員会	管理用外柵	L=63m
60	天川遺跡(2001-A)	須賀町283-2地先	高槻市下水道室	下水道敷設	403.60
61	中寺遺跡(2001-A)	辻子一丁目地内	高槻市下水道室	下水道敷設	689.40
62	神内遺跡(2001-A)	神内二丁目93-22、93-27	澤田和幸	個人住宅	128.06
63	梶原南遺跡(2001-A)	梶原四丁目575-1他	高槻市下水道室	下水道敷設	188.64

表1　平成13年度調査地一覧(2)

No.	遺跡名(地区)	所　在　地	届　出　者	用　途	面積(m²)
1	嶋上郡衙跡(2002-A)	郡家新町418-2	大和ハウス工業㈱	店舗建設	2821.00
2	嶋上郡衙跡(2002-5)	郡家新町395-31	桃木康行	個人住宅	67.47
3	嶋上郡衙跡(2002-B)	清福寺町982-3地先	大阪ガス	ガス管改修	0.72
4	嶋上郡衙跡(2002-4)	郡家新町395-27	古賀敬造	個人住宅	97.67
5	嶋上郡衙跡(2002-1)	清福寺町759-1の一部	小林　清	個人住宅	218.17
6	嶋上郡衙跡(2002-2)	清福寺町759-1の一部	金海一成	個人住宅	175.60
7	嶋上郡衙跡(2002-3)	郡家本町729	大塚久美子	駐車場建設	965.00
8	嶋上郡衙跡(2002-C)	郡家新町7	高槻市長	水路改修	42.42
9	嶋上郡衙跡(2002-D)	清福寺町･川西町一丁目地内	高槻市長	水路柵	34.00
10	史跡 嶋上郡衙跡(2002-E)	郡家新町1138	郡家本町実行組合	研修倉庫	36.00
11	史跡 嶋上郡衙跡(2002-F)	清福寺町982-3地先	高槻市長	道路舗装	325.50
12	史跡 嶋上郡衙跡(2002-G)	清福寺町982-3	高槻市長･コミセン	ガス管改修	延長7.0m
13	史跡 嶋上郡衙跡(2002-H)	清福寺町982-3	高槻市長･コミセン	便所洋式化他	
14	塚原古墳群(2002-A)	塚原二丁目27-1	㈱富士住研	分譲住宅	142000.00
15	上土室遺跡(2002-A)	上土室六丁目2番地他	高橋開発株式会社	宅地造成	36201.69
16	中城遺跡(2001-1)	北昭和台町460-6の一部	橘　宏	個人住宅	83.83
17	中城遺跡(2002-2)	北昭和台町460-6の一部	西野康代	個人住宅	78.20
18	中城遺跡(2002-A)	昭和台町二丁目131の一部	小川貞子	個人住宅	173.82
19	中城遺跡(2002-B)	北昭和台町460-10	島津算夫	個人住宅	165.01
20	中城遺跡(2002-C)	北昭和台町460-8	中澤義治	個人住宅	114.43
21	中城遺跡(2002-D)	北昭和台町460-11	山田　聡	個人住宅	90.01
22	鴨神社跡(2002-1)	赤大路町4-8	山根豊昭	個人住宅	193.17
23	鴨神社跡(2002-2)	赤大路町4-5	得津一夫	個人住宅	70.01
24	闘鶏山古墳(2002-1)	氷室町六丁目1-3他	高槻市教育委員会	規模確認調査	183.00
25	史跡 今城塚古墳(2002-1)	郡家新町686-3他	高槻市教育委員会	規模確認調査	1600.00
26	郡家今城遺跡(2002-A)	氷室町一丁目781-44	塚原俊生	個人住宅	77.31
27	郡家今城遺跡(2002-1)	郡家新町169-1の一部	田辺謙一郎	個人住宅	76.49
28	郡家今城遺跡(2002-2)	郡家新町169-1の一部	山下泰輔	個人住宅	75.74

表2　平成14年度調査地一覧(1)

種別	担当者	調 査 期 間	調　　査　　内　　容
調査	高橋	13.4.11	出丸形成時の盛土(厚さ約1m)・出丸破却時の整地土(厚さ0.4m)検出
調査	橋本	13.6.21	※地表下0.9mで黒灰色粘土(厚さ0.5m以上)の外堀堆積土検出　遺物無し
調査	橋本	13.6.29	※地表下1.0mで青灰色粘土(厚さ1.5m以上)の外堀堆積土検出　遺物無し
調査	高橋	13.7.16	地表下2.1mで褐色粗砂の地山検出　遺構・遺物無し
調査	橋本	13.8.6～10	※地表下約2mまで青灰色砕石の盛土確認　遺構・遺物無し
調査	橋本	13.8.16～20	※地表下1.0mで青灰色粘土の外堀堆積土検出　遺物無し
調査	橋本	13.9.4～17	※近世の地下室遺構・溝2条・ピット等検出　簪・陶磁器・瓦片等出土
調査	木曽	13.10.29～11.2	※地表下0.7mで青灰色粘土の堀堆積土検出　遺物無し
調査	橋本	14.4.3	地表下約2.0mで外堀堆積土検出　遺物無し
調査	宮崎	13.4.4～6.29	横穴式石室3基調査　**本書掲載**
調査	橋本	13.12.11～14	地表下1.0mで黄灰色土の地山検出　遺構・遺物無し
調査	橋本	13.5.31	史跡現状変更　遺構面に達せず
調査	木曽	13.12.7～14.3.15	掘削を伴わず
調査	橋本	13.12.7～14.3.15	遺構・遺物無し
調査	木曽	14.3.7～12	地表下0.3mで青褐色粘土の地山確認　遺構・遺物無し
調査	西村	13.11.12～14.3.15	地表下約0.5mで赤褐色砂質シルトの地山確認　遺構・遺物無し

遺跡別・調査年月日順に配列　※は高槻市文化財調査概要ＸＸⅧ「嶋上遺跡群26」に掲載

種別	担当者	調 査 期 間	調　　査　　内　　容
調査	木曽	14.4.8～18	地表下2.5mで8世紀代の遺構面確認　柱穴検出　土師器・須恵器出土
立会	西村	14.7.9	※地表下1.3mで黄灰色粘質土の地山確認　遺構・遺物無し
立会	橋本	14.8.12	遺構面に達せず
立会	木曽	14.9.27	※地表下1.3mで黄灰色粘土の地山確認　遺構・遺物無し
立会	西村	14.9.5	※地表下0.72mで黄褐色礫砂の地山確認　遺構・遺物無し
立会	木曽	14.9.5	※地表下0.85mで灰黄褐色砂質土の地山確認　遺構・遺物無し
立会	鐘ケ江	14.9.9	※地表下0.3mで青灰色砂礫の地山確認　遺構・遺物無し
調査	西村	14.12.4～25	L=15.0～15.1mで青灰色粘土の地山確認　遺構・遺物無し
立会	宮崎	15.2.6	盛土内の掘削
調査	橋本	14.6.14	史跡現状変更　遺構面に達せず
調査	橋本	14.8.1～10	史跡現状変更　遺構面に達せず
調査	橋本	14.8.12	史跡現状変更　遺構面に達せず
調査	橋本	14.9.17	史跡現状変更　遺構面に達せず
調査	高橋	14.12.2～15.2.28	6c後半～7c前半の横穴式石室2基を調査　陶棺片・耳環・鉄製品・土器類出土
調査	橋本	14.7.3～	1463基の中世墓検出　調査継続中
立会	木曽	14.11.26～28	※地表下1.5mで淡黄灰色土の地山確認　遺構・遺物無し
立会	木曽	14.11.26～28	※地表下1.85mで淡黄灰色土の地山確認　遺構・遺物無し
立会	宮崎	15.2.3	盛土内の掘削
立会	木曽	15.2.18	地表下1.5mで暗黄灰色土の地山確認　遺構・遺物無し
立会	木曽	15.2.18	地表下1.55mで暗黄灰色土の地山確認　遺構・遺物無し
立会	木曽	15.2.18	地表下1.49mで暗黄褐色土の地山確認　遺構・遺物無し
立会	木曽	14.7.1	※地表下0.8mで暗黄褐色土の地山確認　遺構・遺物無し
立会	木曽	14.11.27	※地表下0.75mで黄灰色粘土の地山確認　遺構・遺物無し
調査	高橋	14.4.8～7.15	全長86.4mの前方後円墳　後円部に2基の竪穴式石室を確認　葺石・土器片検出
調査	宮崎	14.5.28～15.3.31	史跡現状変更　北側の内堤・内堀・造出の確認調査(第6次)　**本書掲載**
調査	木曽	14.3.22	地表下1.1mで青灰色土の地山確認　遺構・遺物無し
立会	木曽	14.12.17～18	※地表下0.85mで青灰色粘土の地山確認　遺構・遺物無し
立会	木曽	14.12.17	※地表下0.95mで青灰色粘土の地山確認　遺構・遺物無し

No.	遺跡名(地区)	所　在　地	届　出　者	用　途	面積(m²)
29	郡家今城遺跡(2002-3)	郡家新町169-1の一部	安達勝久	個人住宅	76.49
30	宮田遺跡(2002-1)	宮田町三丁目87-4	古川利夫	個人住宅	207.49
31	大蔵司遺跡(2002-A)	大蔵司三丁目115-3	高谷正夫	駐車場建設	272.00
32	塚脇古墳群(2002-A)	大字原地内	高槻市長	公園整備	10.00
33	塚脇古墳群(2002-A)	塚脇一丁目地内	高槻市長	下水道整備	450.00
34	田能北遺跡	大字田能地内	大阪府北部農と緑の総合事務所	圃場整備	1893.00
35	田能北遺跡(2002-1)	大字田能小字上条1	北舎眞澄他	個人住宅	954.34
36	天神山遺跡(2002-1)	天神町二丁目2-6	大宅光彦	個人住宅	138.39
37	天神山遺跡(2002-2)	天神町二丁目10-36	宮地和俊	個人住宅	299.58
38	天神山遺跡(2002-3)	天神町二丁目10～32	山下吉信	個人住宅	325.48
39	天神山遺跡(2002-4)	天神町二丁目932-93	愛甲哲也	個人住宅	156.56
40	天神山遺跡(2002-5)	天神町一丁目1117	森　嘉和	社殿建築	13279.39
41	天神山遺跡(2002-A)	天神町二丁目7-40	㈱大江住宅	分譲住宅	1000.00
42	天神山遺跡(2002-B)	天神町二丁目973-10	倉繁政輝	個人住宅	90.80
43	慈願寺山遺跡(2002-A)	月見町28-10･28-14の一部	㈱明野住宅	個人住宅	327.01
44	高槻城跡(2002-1)	出丸町992-13	吉田みどり	個人住宅	59.68
45	高槻城跡(2002-2)	城内町1015-25	門　忠男	個人住宅	120.32
46	高槻城跡(2002-4)	八幡町1052-13	太田美智子	個人住宅	78.71
47	高槻城跡(2002-3)	城内町1015-8	葛葉哲哉	個人住宅	107.93
48	高槻城跡(2002-A)	大手町1133-3他	高槻市長	道路改良	405.10
49	高槻城跡(2002-B)	大手町地内	水道部	水道管敷設	15.60
50	高槻城跡(2002-C)	出丸町982の一部	㈱住まいのタナカ	分譲住宅	226.12
51	高槻城跡(2002-5)	大手町1133-3の一部	伊藤啓二郎･初子	個人住宅	146.49
52	高槻城跡(2002-6)	城内町1015-1の一部	片山正治	個人住宅	65.43
53	高槻城跡(2002-D)	野見町1492-1	高槻市長	公園整備	5000.00
54	高槻城跡(2002-E)	野見町1146-2他	野見神社	神社増築	4188.60
55	高槻城跡(2002-F)	城内町1015-26の一部	田栗義輝	個人住宅	68.26
56	高槻城跡(2002-G)	城内町1015-1の一部	諏訪　修	個人住宅	67.80
57	高槻城跡(2002-H)	城内町1015-26の一部	河内裕司	個人住宅	65.51
58	高槻城跡(2002-I)	出丸町982-3	㈱住まいのタナカ	分譲住宅	79.97
59	高槻城跡(2002-J)	出丸町982-3	㈱住まいのタナカ	分譲住宅	79.97
60	安満遺跡(2002-1)	高垣町280-1	米澤操･郁子	共同住宅	998.56
61	史跡 安満遺跡(2002-A)	八丁畷町230-6他	高槻市教育委員会	ﾈｯﾄﾌｪﾝｽ設置	延長159m
62	安満山古墳群(2002-A)	安満御所の町1326他	高槻市長	葬祭センター	2500.00
63	天川遺跡(2002-A)	辻子一丁目地内	高槻市長	下水道整備	607.30
64	梶原南遺跡(2002-A)	梶原四丁目4-5	米原祥介	店舗建設	995.00
65	梶原南遺跡(2002-B)	梶原中村町8他	高槻市長	下水道整備	1269.20

表2　平成14年度調査地一覧(2)

	個人住宅	共同住宅	駐車場・倉庫・店舗	造成工事分譲住宅	道路・水路関係	上･下水道	試掘・確認調査	その他	合　計
平成13年度	27	3	2 (1)	15	2 (2)	5	2 (1)	7 (4)	63 (8)
平成14年度	33	1	5 (1)	6	4 (1)	4	2 (1)	10 (3)	65 (6)

表3　届出別調査及び立会件数　　下段(　)内は史跡の現状変更等許可申請に伴う調査

種別	担当者	調査期間	調査内容
立会	木曽	14.12.18	※地表下0.95mで青灰色粘土の地山確認　遺構・遺物無し
立会	西村	14.12.17	※地表下0.5mで赤灰褐色シルトの遺物包含層確認　土師器・須恵器・瓦器出土
立会	西村	15.3.24	地表下0.3mで灰褐色砂礫の河川堆積層確認　遺物無し
立会	高橋	14.9.27	遺構面に達せず
調査	木曽	14.11.19～15.3.14	地表下2.0mで暗灰色土の地山確認　遺構・遺物無し
調査	大阪府	14.8.8～11.29	大阪府が調査
立会	木曽	14.12.24	※地表下1.2mで暗黄灰色砂質土の地山確認　遺構・遺物無し
立会	木曽	14.5.16～20	※地表下1.2mで黄灰色砂質土の地山確認　遺構・遺物無し
立会	高橋	14.7.18	※地表下0.54mで黄褐色粘質土の地山確認　遺構・遺物無し
立会	高橋	14.8.9	※地表下0.4mで黄褐色土の地山確認　遺構・遺物無し
立会	高橋	14.8.29	※地表下0.35mで黄灰色粘質土の地山確認　遺構・遺物無し
立会	高橋	14.9.2	※掘削は基壇内でおさまる
調査	橋本	15.2.28	地表下0.6mで地山確認　遺構・遺物無し
立会	高橋	15.3.19	遺構面に達せず
立会	橋本	14.12.18	地表下0.4mで地山確認　遺構・遺物無し
立会	木曽	14.7.8～12	※地表下1.0mで暗黄灰色粘土の地山確認　遺構・遺物無し
立会	高橋	14.7.16～18	※地表下1.5mで黒灰色粘土の外堀堆積土確認　遺物無し
立会	高橋	14.9.3	※地表下0.9mで暗青灰色粘土の外堀堆積土確認　遺物無し
立会	高橋	14.9.12	※地表下1.1mで黒灰色粘土の外堀堆積土確認　遺物無し
立会	橋本	14.11.20	地表下1.0mで地山確認　遺構・遺物無し
立会	橋本	14.11.20	地表下1.0mで地山確認　遺構・遺物無し
立会	橋本	14.11.29	地表下0.5mまでの掘削で、遺構遺物検出できず
立会	木曽	14.12.12	※地表下1.0mで黄褐色粘土の地山確認　遺構・遺物無し
立会	木曽	14.12.20	※地表下1.05mで黒灰色粘土の外堀堆積土確認　遺物無し
調査	西村	15.1.7～2.28	二の丸東辺等検出　**本書掲載**
立会	西村	15.2.3	掘削は旧建物の掘形内でおさまる
立会	橋本	15.2.30	地表下1.0mで黒灰色粘土の外堀堆積土確認　遺物無し
立会	西村	15.3.13	地表下1.3mで青灰色シルトの外堀堆積土確認　遺物無し
立会	西村	15.3.13	地表下1.4mで青灰色粘土の外堀堆積土確認　遺物無し
立会	西村	15.3.17	地表下1.58mで灰黄褐色粘質土の地山確認　遺構・遺物無し
立会	西村	15.3.17	地表下1.4mで灰白色シルトの地山確認　遺構・遺物無し
調査	高橋	14.10.2～11	※地表下約1.5mで、奈良時代以降の遺構面を確認　弥生土器・土師器出土
調査	橋本	15.5.14	史跡現状変更　遺構面に達せず
立会	橋本	14.9.27	造成済み部分の工事であり、遺構・遺物無し
調査	橋本	14.12.4～15.3.14	盛土内の掘削
調査	橋本	14.9.13	地表下4.0mで地山確認　遺構・遺物無し
調査	橋本	14.12.4～15.3.15	地表下1.5mで地山確認　遺構・遺物無し

遺跡別・調査年月日順に配列　※は高槻市文化財調査概要ＸＸＸ「嶋上遺跡群27」に掲載

遺跡名	H13年度	H14年度	遺跡名	H13年度	H14年度	遺跡名	H13年度	H14年度
嶋上郡衙跡	23	13	宮田遺跡	1	1	古曽部・芝谷遺跡	1	
塚原古墳群		1	津之江南遺跡	1		伝・秀吉陣跡	1	
上土室遺跡		1	大蔵司遺跡	1	1	高槻城跡	9	16
中城遺跡	6	6	宮之川原遺跡	3		安満遺跡	1	2
鴨神社跡		2	塚脇古墳群		2	安満山古墳群	2	1
富田遺跡	1		田能北遺跡	1	2	天川遺跡	1	1
岡本山古墓群	1		田能南遺跡	1		中寺遺跡	1	
闘鶏山古墳	1	1	天神山遺跡		7	神内遺跡	1	
今城塚古墳	2	1	慈願寺山遺跡		1	梶原南遺跡	1	2
郡家今城遺跡	2	4	芥川遺跡	1		合計	63	65

表4　遺跡別調査及び立会件数

2．調査の概要

安満山古墳群の調査（3）

西　村　恵　祥
高　橋　公　一
宮　崎　康　雄

安満山山塊南斜面に展開する安満山古墳群は、40基あまりの横穴式石室をもつ古墳の存在が知られるが、近年市営公園墓地の整備に伴い、山塊の東半部にあたる萩之庄支群Ｂ１号墳(高槻市教育委員会編『高槻市文化財年報　平成11年度』参照)、同Ｃ１号墳（高槻市教育委員会編『高槻市文化財年報　平成12年度』参照）の調査をおこなってきた。平成13年度は、平成11年度に測量調査をおこなったＢ２号墳と、新たに発見した２基の古墳（Ｂ３号墳・Ｂ４号墳）について発掘調査を実施した。

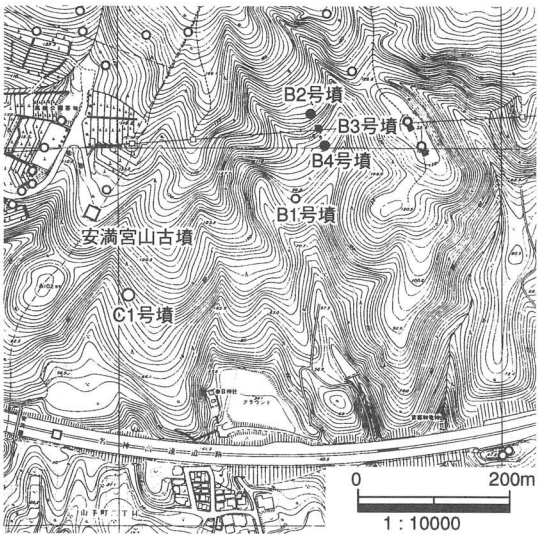


図1　古墳位置図

調査地は、高槻市大字下地内にあたり、小字名は水箇峰で、標高101～125mの南斜面に位置している。

Ｂ２号墳（図版第１・２）

尾根の先端部斜面に位置し、墳丘は中央部が陥没しているが比較的良好に残存していた。直径は東西14m、南北13m、現存する高さ５mの円墳である。

内部主体は南側に開口する両袖式横穴式石室で、天井石は奥壁側の一石を残しすべて抜き取られ、側壁も奥壁側は完存するものの、玄室中央から羨道部にかけては１、２石を残すのみであった。

玄室は長さ3.7m、幅は奥壁側で1.63m、中央部で1.83m、羨道寄りが1.75mで、中央がやや膨らむ形である。高さは3.0mを測る。

天井石で唯一現存するのは長さ1.2m以上、幅1.5m、厚さ0.5mの板状の石で、前端部が奥壁から0.8mの位置で架構されている。

奥壁は幅約２m、高さ約1.3mの巨石を最下段とし、全体として５段ないし６段で構成する。側壁は長さ１～1.5m以下の石を６段から８段積みあげ、天井石に達する。奥壁側壁ともに、鉛直方向からおよそ５～10度の角度で内傾する。

玄門には石を縦方向に置き袖部を形成するが、西袖幅は0.25mで明確に袖部を形成しているのに対し、東袖幅は0.07mと小さくやや羨道寄りに位置しており、左右非対称となっている。

羨道の長さは4.7m、幅は玄門付近で1.4m、開口部で1.0mである。

玄室の床面はほぼ平坦で、標高117.25～117.3mである。羨道は開口部に向けてやや傾斜しており、開口部では標高117.1mである。玄室床面には扁平な割石を用いた棺台が設けられ、割石の配置から１体ないし２体が埋葬されたと推定される。

遺物としては、鉄刀１点、須恵器高杯１点のほか、鉄釘が出土している。

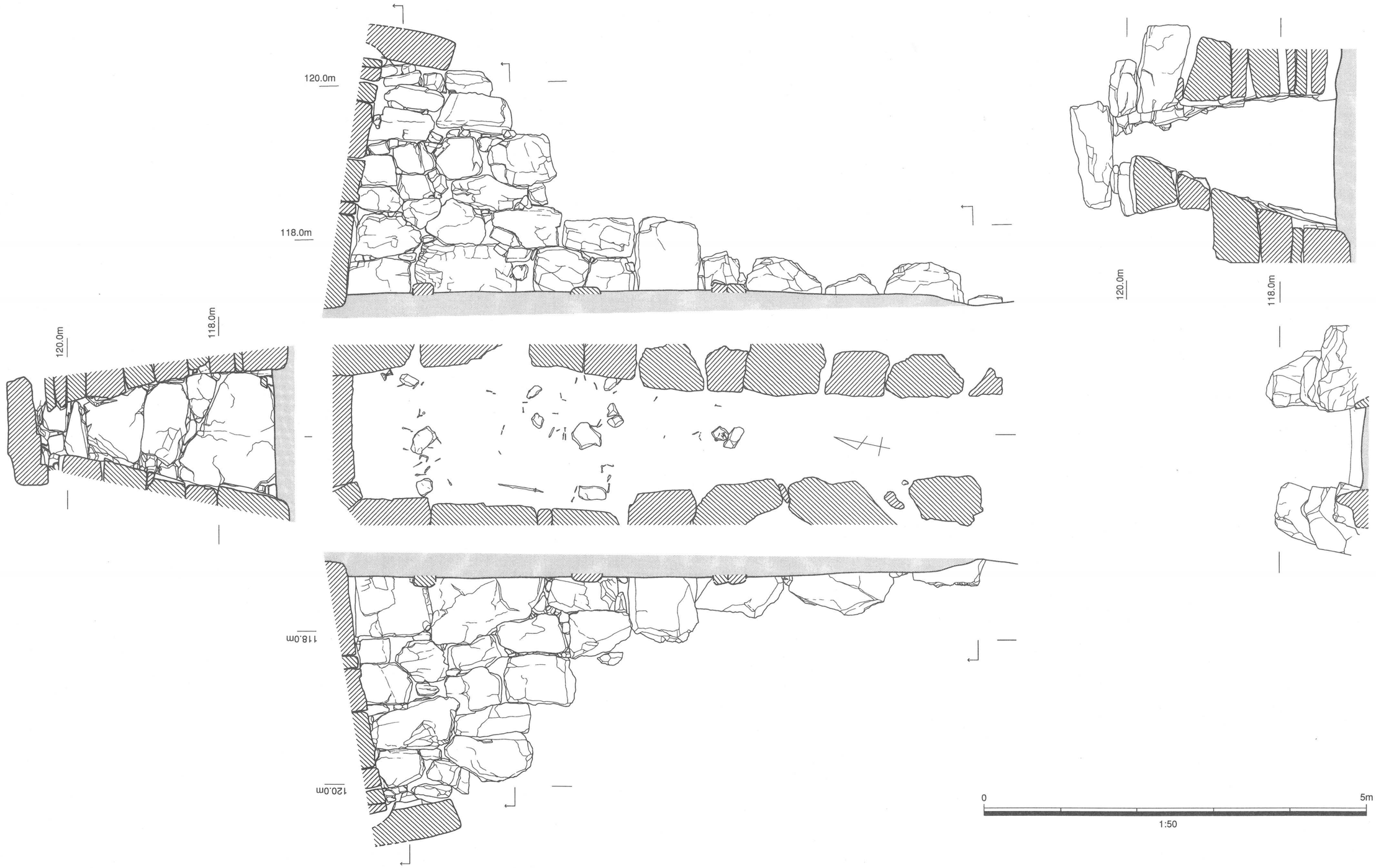


図2　B2号墳石室実測図

築造時期は６世紀後半とみられる。

なお、Ｂ２号墳は市営公園墓地の緑地地区の一画に修復保存し、公開されている。

Ｂ３号墳（図版第３）

Ｂ２号墳の南約10mの緩斜面に位置し、墳丘上部が流失し古墳全体が堆積土により埋没していた。断面観察から墳丘西側斜面は確認できたが、東側斜面は確認できなかった。墳形は不明であるが、西側斜面裾から石室中央部までの距離を折り返すと長さ6.6mであり、現存する高さは1.2mと推定される。

内部主体は南向きの両袖式横穴式石室で、天井石は奥壁側の一石を残し、抜き取られていたが、側壁・奥壁は完存している。玄室では１段目の石は比較的大きい自然石を据え、上部では扁平な割石を４～５段積み上げている。羨道の側壁は両側とも２石並べただけのものであり、天井及び開口部には閉塞石らしき石を乱雑に積み上げるだけのかなり簡略化した横穴式石室である。

玄室は長さ約2.9m、幅約0.7m、高さ約1.0mである。袖幅は両側ともに0.13mである。羨道の長さは0.63m、幅は玄門付近で0.3m、南端で0.2m、高さは0.2mを測る。石室床面は南に向かってやや傾斜しており、奥壁部で標高111.1m、南端で109.9mを測る。

玄室床面には扁平な割石をＥ字状に配した棺台が設けられていた。棺は腐朽し遺存していなかったが、鉄釘が出土していないことから、組合式木棺と推測される。

遺物としては、玄室中央部で耳環が２点重なって出土した。

年代を推定する遺物は出土していないが、小規模で形骸化した横穴式石室の形態から、Ｂ２号墳・Ｂ４号墳よりは後出するとみられる。

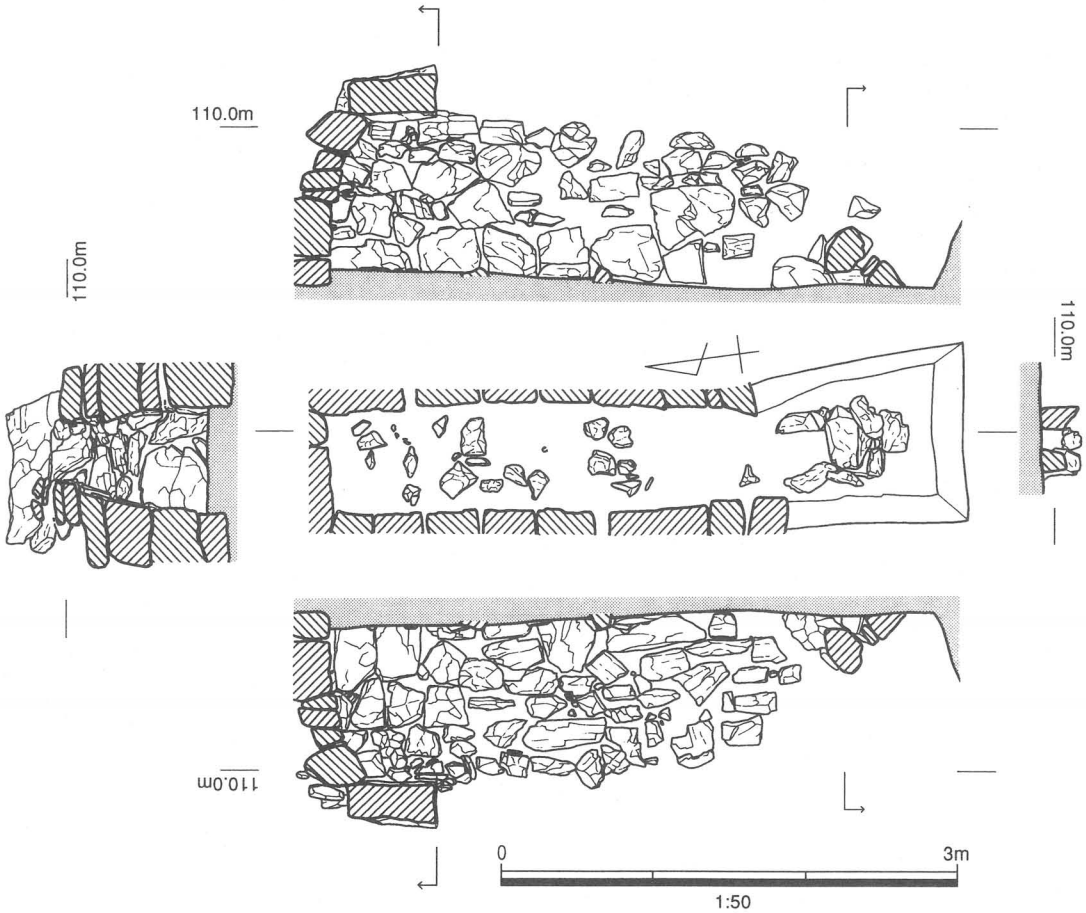


図3　B3号墳石室実測図

B４号墳（図版第４・５）

Ｂ２号墳の南約40mの緩斜面に位置する。墳丘の上半部分は失われ、古墳全体が山丘斜面の堆積土によって埋没していた。しかし、墳丘下部の盛土は残存しており、古墳の西側では周溝が確認できた。これらを参考にすると、直径13～14mの円墳で、その外側に幅約３mの周溝が存在していたと推定できる。ただし周溝が古墳をめぐっていたとは確定できず、レベル的に高い北側にのみ存在していた可能性もある。

内部主体は南側に開口する両袖式の横穴式石室で、天井石はほとんどが抜き取られ、残った石も石室内に落ち込んでいた。側壁も羨道側の崩落が激しく遺存状態は悪いが、奥壁側では比較的良く残り、奥壁は巨石２段が積まれたままで存在する。閉塞石は存在しなかった。

玄室は長さ3.5m、幅は奥壁寄りで1.50m、中央で2.05m、羨道寄りで2.05mとなり、奥壁側に狭くなる形態である。奥壁の現存高は2.4mを測るが、さらにもう数段分上方に積まれていた可能性があり、天井の高さは不明である。袖石の幅は西側は0.38m、東側は0.28mである。羨道の長さは4.50m、幅は玄門付近で1.40m、開口部で1.40mを測る。玄室床面はほぼ水平で標高101.4m、羨道床面は開口部に向かってやや傾斜し、開口部は標高101.0mを測る。

玄室の南西隅には、一辺0.2～0.1mの小礫を長さ1.32m、幅0.65mの範囲に敷き詰め、その外郭に一辺0.3m程度の角礫を立てて囲う区画がみられる。８～９世紀の土師器が小礫の下部から出土していることから、律令期に石室が再利用された際の遺構とみられる。

玄室のほぼ全面からは散乱した状態で遺物が出土し、原位置を留めているものはほとんどないとみられる。このうち、土器類は玄室の南半（羨道寄り）に集中する傾向がみられ、東側と西側の袖部付近でかなり密集して出土した。これらの土器は６世紀後半頃を上限に７世紀初頭までの年代が想定され、須恵器には杯・高杯、土師器には直口壷・高杯がある。

また鉄釘が玄室のほぼ全面で分散して出土し、木棺の存在が推測できる。一方、耳環が玄室南半一帯で５個、羨門の南約１mの地点で１個、合計６個が出土しており、３体の埋葬が指摘されるが、６個のうち１個体のみが軸の細い形態で、出土した６個のみでは２個一組が成り立たない。このことから、少なくとも４体の埋葬が想定でき、継続的に追葬がなされたと考えられる。

				Ｂ２号墳	Ｂ３号墳	Ｂ４号墳
墳丘	墳　形			円　墳	不　明	円　墳？
	直　径			東西14m、南北13m	約６m	東西14m、南北13m
	現存高			５m	—	2.4m
石室	石室形式			両袖式横穴式石室	形骸化した横穴式石室	両袖式横穴式石室
	玄室	長　さ		3.68m	2.9m	3.5m
		幅	奥	1.63m	—	1.5m
			中央	1.83m	0.7m	2.05m
			玄門	1.75m	—	2.05m
		高　さ		3.0m	1.0m	2.4m以上
	玄門	西・幅		0.25m	0.13m	0.38m
		東・幅		0.07m	0.13m	0.28m
	羨道	長　さ		4.65m	0.63m	4.5m
		幅	玄門	1.38m	0.3m	1.4m
			開口部	1.0m	0.2m	1.4m
		高　さ		0.95m以上	0.2m	1.2m以上

表1　墳丘及び石室計測表

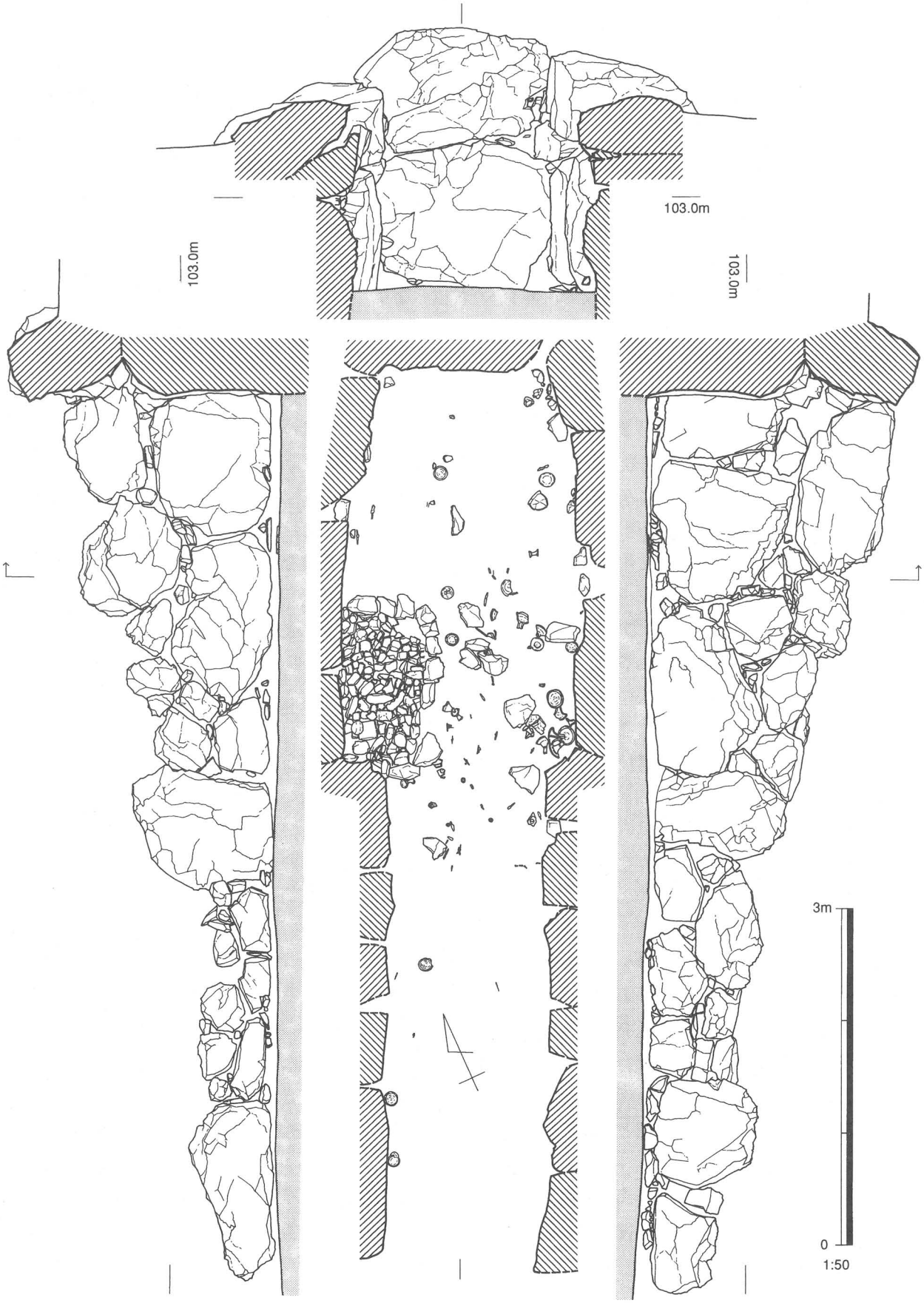


図4　B4号墳石室実測図

まとめ

今回調査した３基の古墳について、成果を踏まえたなかで、今後の研究にむけてのいくつかの課題を指摘してまとめにかえたい。

同一尾根の南斜面に築かれた３基の古墳のうち、Ｂ２号墳とＢ４号墳は規模がほぼ同じで、出土遺物から推定される築造年代も若干Ｂ２号墳が先行するとみられるものの、どちらも６世紀後半頃とみられる。しかし、Ｂ２号墳が標高約120mの急峻な斜面に築かれたのに対し、Ｂ４号墳は20mも低い緩斜面に位置しており、その立地は異なる。両古墳の立地条件を比較すると、急斜面にあるＢ２号墳は標高が高いため平野部からの視覚性に勝る反面、奥まった位置となり、築造に際して困難が伴う。一方Ｂ４号墳は眺望はＢ２号墳に劣るが、平野部に近く、石材等の搬入がしやすい。どちらも一長一短があり、一方が特に優れている立地とは言いがたいが、Ｂ２号墳が先行して築かれたのならば、築造の困難さを差し引いても、古墳の視覚性あるいは眺望という点を重視してこの場所が選ばれ、築造されたと推測される。ここで想起されるのは、Ｂ２号墳から120m南に位置するＢ１号墳の立地である。Ｂ１号墳は標高は100m足らずであるが、Ｂ２号墳との間は平坦な鞍部となって南の平野部に突出し、あたかも独立した尾根上に位置しているようにみえる特別な環境にある。Ｂ１号墳は粘土槨を有する４世紀代の古墳(Ｂ０号墳)を、６世紀中頃に再利用して築造したことが判明しており、まさしく視覚性を意識した占地であると言えよう(前出『高槻市文化財年報　平成11年度』参照)。Ｂ１号墳を含めた３基の古墳は、それぞれの時点で最も視覚的に条件の良い場所を順次選択したものと推測される。

さて、Ｂ３号墳では小規模で特異な形状の石室が検出された。長さ約2.9m、幅約0.7m、高さ約1.0mという規模と形状は横穴式石室とするには違和感もあり、竪穴系の小石室とする方が妥当とも考えられる。しかし、南側小口部に壁面が築かれず、それぞれの側壁内法に平行して１石が、あたかも玄門のように存在することから、この部分は羨道をあらわしたものとして、形骸化した横穴式石室と判断した。とはいえ、壁面の１段目は自然石を用いているものの上部では割石を積んでいる点、そしてなによりも実際の埋葬において、内法0.2～0.3mの羨道が入り口の機能を果たしたとはとうてい考えられないことからも、横穴式石室とはいいがたい側面がみられる。ともあれ、一方の小口部に壁面が無く、形式的ながらも羨道や閉塞石が存在していることがより本質的であり、横穴式石室の「意識」を踏襲すると考えるのである。一方、その立地も注目される。すなわちＢ３号墳は、Ｂ２号墳から約10m南に位置し、その付近はＢ２号墳の立地する急斜面が緩斜面にかわる傾斜変換点にあたり、眺望も悪く見栄えのしない場所であり、あたかもＢ２号墳の直下に位置している様に見える。こうした立地は、前述の視覚性を重視し、古墳の間に一定の距離をおくＢ１・Ｂ２・Ｂ４号墳とは全く異なる。このように、Ｂ３号墳は構造だけでなく立地のうえでも特異な存在であるのだが、これらの特異性は各々に要因があるのではなく、相互に関連した必然的なものと思える。狭小で簡易的な構造の石室と、急斜面の直下という占地には通常の古墳とは異なる論理がうかがえる。つまり形骸化した石室を持つＢ３号墳は、個別の良好な立地を選択せず、一定の規模と構造をもつＢ２号墳に付属するような近接した目立たない場所に築造されたと推定される。

以上、古墳の立地について指摘したが、Ｂ３号墳のような形骸化した石室については、安満山古墳群内では初出であり、石室の位置付けを含めて今後の課題となる。類例の増加をまって再考することとしたい。

今城塚古墳第５・６次規模確認調査

宮　崎　康　雄

１．はじめに

今城塚古墳は６世紀前半に築かれた淀川北岸では最大規模の前方後円墳である。全長190mの墳丘の周囲には二重の濠と内堤が巡り、総長は350mをはかる。「今城」の名は戦国時代に墳丘や濠を利用して城砦とされたことに由来する。

本市教育委員会では保存整備に向けた規模確認調査を平成９年度から継続実施し、これまでに墳丘や内・外濠などの規模や形状、その後の改変の様子などを知る手がかりを得ている。

今回の第５・６次調査は、古墳北側の造出から外濠にかけての状況把握、内堤の埴輪祭祀区の範囲や遺存状況を確認するため、平成13・14年度に実施した。とくに内堤北側については、以前に大形の家や武人などの形象埴輪を採集したとされる地点が、平成８年度に実施した測量調査によって外濠側に張り出した形状となることが判明しており、この一帯は埴輪祭祀の場であることが想定されていた。

図1　調査位置図

2．遺構・遺物

調査は北側内堤と造出及び内外濠の状況把握のため、各部にトレンチを設定して調査を進めた。以下、遺構ごとに概略を記す。

（1）外濠

外濠の規模・形状を把握するために、2ヶ所のトレンチを設定した。旧耕作土・整地土を除去すると地表下約0.6mで地山となり、3・4次調査でみられた外濠の痕跡や堆積土は確認できなかった。トレンチ中央部では最大幅7m、深さ2mの東西方向にのびる大溝を検出した。砂礫の多い埋土からは、一定量の水流がうかがえる。底付近から中層にかけて家形埴輪片、上層からは11世紀中頃の瓦器椀が出土した。堆積土最上面は整地土によって覆われていることから、中世以降に整地がなされた際に当該部の外濠が削平されたと考えられる。

このほか、北端部では長辺2～3m、短辺1.5m前後をはかる方形の浅い落ち込みが数カ所にみられた。削平された土壙とするなら、狐塚古墳群で検出した土壙墓群の縁辺部に相当する可能性が考えられる。

（2）内堤

内堤は南北両側面が削平・崩落などにより旧状を保たないが、上面からは円筒埴輪列と形象埴輪群及び溝などを検出した。

内堤は上面幅約18m、裾幅約31m、外濠底からの高さ2mをはかる。築造時の地表面（標高27m）から厚さ1.3～1.5mの盛土を行う。盛土は礫・砂質土を主体としたもので、外濠側から墳丘側に向かって断面三角形～台形の土盛りを形成しながら築くことが判明した。

調査区中央部では内堤から北に突出した張出を設けていた。西端部は攪乱を受けてはいるが、上面の東西は現存長で62m、遺存状況から判断すれば65mと考えられる。南北幅については現況で約6mを測る。上面は均質な黄灰色土に被われ、外濠側（北側）に向かってやや傾斜する。土層断面をみると、砂質土・粘質土を主体とした盛土を水平方向に積み上げていた。盛土は外濠掘削後に行っており、内堤斜面及び外濠底に腐植土や堆積土などが堆積していないことから、内堤及び外濠築造後間もなく張出を築いたものと考えられる。造成に際しては地山を掘り込んだ外濠南辺部に粘質土を水平に積み上げたものと判断されるが、外縁部については遺存しないために明確でない。現存する北端部裾の盛土が北にむかって厚くなることから、内堤と同様に北端部から南へ順次盛土を行ったのであろう。

内堤上面には側縁部と平行となって東西に続く円筒埴輪列が南北に各1条あり、両者の列間距離は心々で約14.7m、内堤上端部から約1.7mを測る。埴輪の間隔は5～10cmですべて普通円筒を用いていた。底部付近から2～3段目の突帯付近までが現存するが、破損・攪乱・散逸により原位置を離れた個体も少なくない。底部径は30～40cmと数種の大きさがみられ、北埴輪列（外濠側）に大形品を多用する傾向が看取できる。外面調整はタテハケであるが、二次調整にB種ヨコハケを施す例もわずかに認められる。底部を打ち欠く個体もみられた。掘形の平面形は対向する円弧が連なった布堀状となり、深さは0.1～0.3mである。

北埴輪列の張出東端部付近では現況埴輪列の下方に底部より上を打ち欠いた2個体の円筒埴輪が埋置され、ちょうど3個体の埴輪が直下の2基にまたがった状態となっていた。他に同様の状況は見られず、その目的等は不明である。

形象埴輪は張出のほぼ全面にわたって分布し、一部が地表面に露頭した状態となっていた。現在の

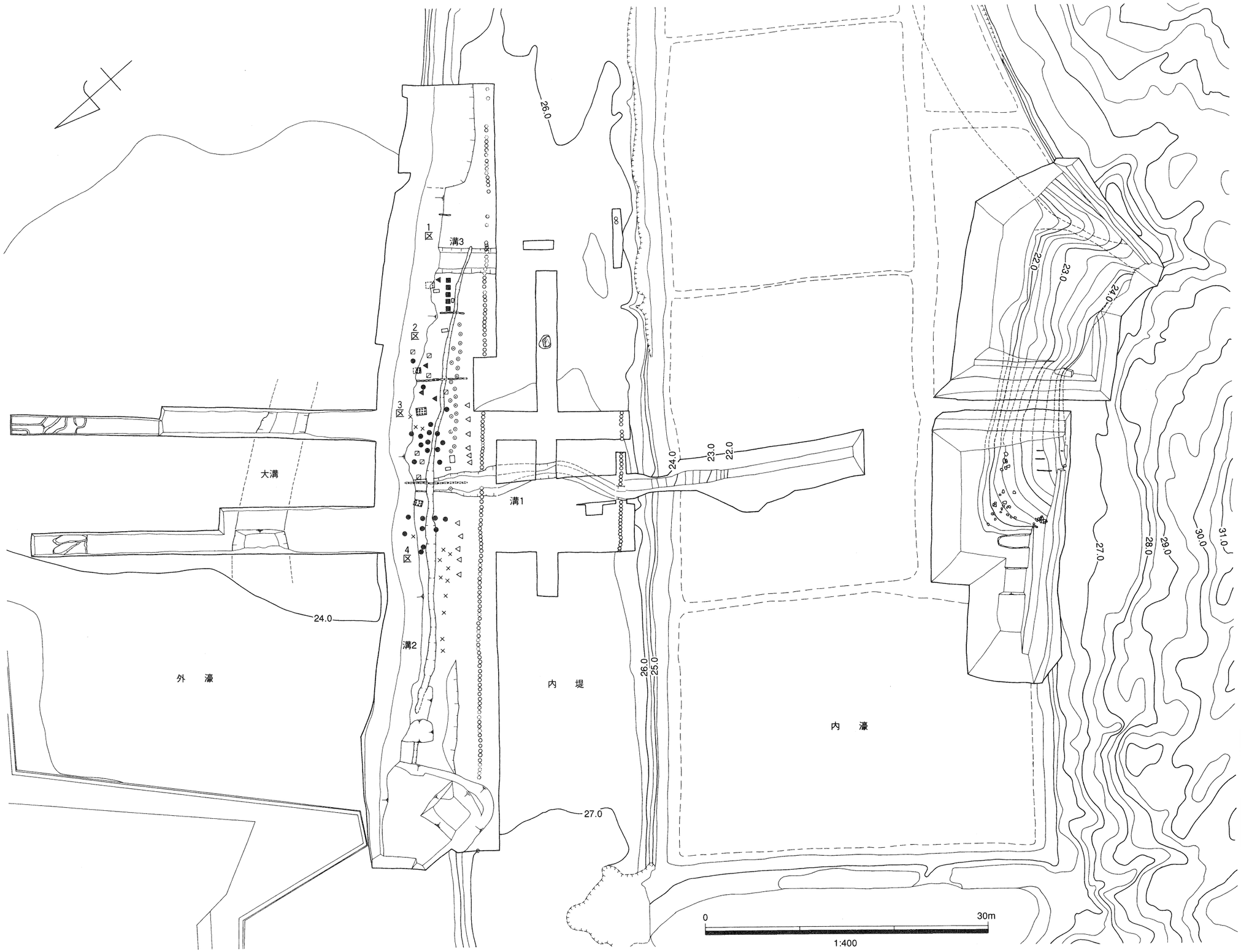

大溝
外　濠
内　堤
内　濠
溝1
溝2
溝3
1区
2区
3区
4区
26.0
24.0
23.0
22.0
25.0
27.0
28.0
29.0
30.0
31.0
0
30m
1:400
凡　例
家
人物
柵・門
鶏
水鳥
動物
大刀・盾
蓋
不明
円筒

図2　遺構平面図

ところ、家形18点、柵形24点、門形２点、器財31点（蓋形６点、甲冑形２点、大刀形15点、盾形１点、靫形１点、不明６点）、人物28点（武人形４点、鷹匠形２点、力士形４点、冠帽男子１点、座位男子４点、巫女形８点、不明５点）、動物33点（馬形８点、牛形２点、鶏形５点、水鳥形13点、形態不明５点）の合計136点を確認している。

形象埴輪は張出の黄灰色土上面に据え置いた状態で検出した。そのうち、大刀や蓋など基部をとどめる個体の多くは掘形が確認できず、埴輪の据置と黄灰色土の被覆が同時になされた可能性が指摘できる。

埴輪群のなかで中心的な位置を占める家については調査区中央部に集中し、西側には少ない。屋根の形式は入母屋が多くを占め、千木や堅魚木を伴う。切妻や寄せ棟のほか、片流れ形式がみられる。入母屋のうち円柱高床式の大形建物が４棟あり、上屋、下屋＋母屋、高床円柱部の３分割で成形・焼成される。最も西側に位置する家は屋内に上下逆にした須恵器蓋を置いていた。

柵形は平面長方形の箱形となった細長い埴輪で、直列することによって祭祀区を細分していた。上端面は鋸歯状となり、長辺側の両側面には上下二段の突帯、短辺側には円形透かしを穿つ。長さ40～44cm、幅10～12cm、高さ38～44cmを測る。

門形は直立する二本の円柱の下端部を断面方形の粘土で繋ぎ、その上面に長方形の粘土板を水平に据えたものである。柵列の中央に位置した二脚門と考えられるが、上部の構造は不明である。

このほか、巫女形などすべての人物埴輪に両下肢が表現されることも特記できよう。

溝は内堤と張出上面で検出したもので、いずれも後世の掘削による。溝１は、調査区中央を南北に貫く。掘削排土はおもに東側へ盛っているためにわずかな高まりとなり、多量の埴輪が含まれる。

溝２は内堤北縁にそって東西に続く幅0.4～0.8m、深さ0.6mの溝である。底に腐植土が堆積し、埴輪とともに近世瓦が出土した。

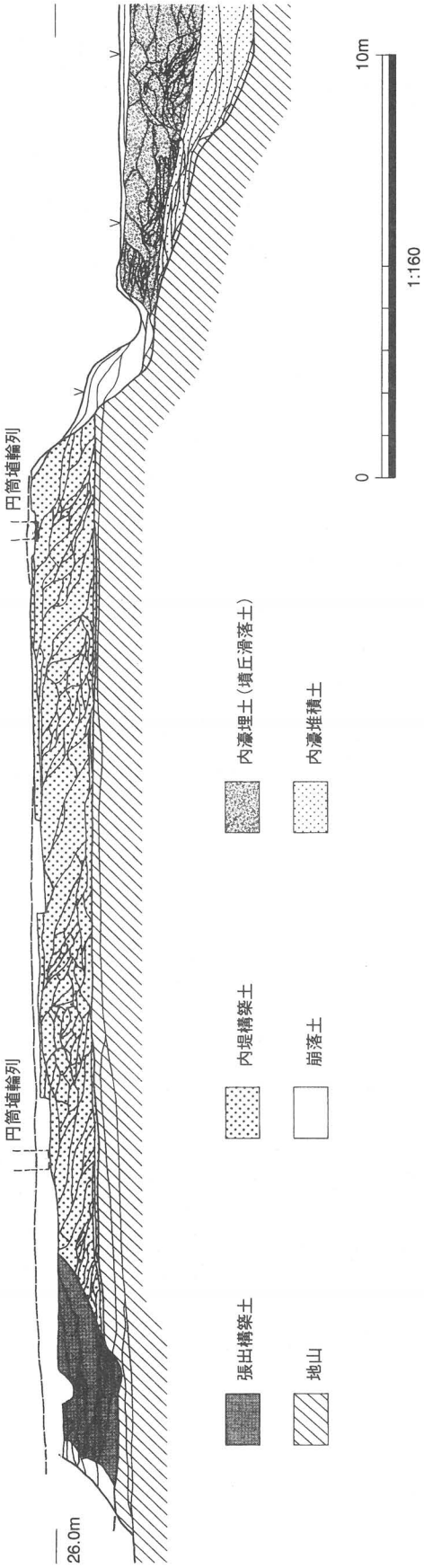


図3　内堤・張出・内濠土層図

溝３は内堤と直交するように掘削した幅３ｍ、深さ0.2ｍの南北溝である。掘削土の一部は溝の西側に盛り上げて最大幅８ｍ、高さ0.6ｍの土塁状となっていた。南北の円筒埴輪列と形象埴輪群を切る。

＜内濠＞

地表面からの深さは３ｍで、造出と内堤の斜面裾間の幅は27ｍを測る。横断面の形状は逆台形となっており、底はほぼ平坦である。内堤側斜面は水際付近が約16度と緩やかであるが、全体では約29度の傾斜をもつ斜面である。墳丘側も水際付近が約15度と緩やかであった。斜面裾には転落した人頭大の円礫が泥土中に散見でき、護岸列石が存在したと考えられる。層序は底の砂質土上に泥土が約１ｍの厚さで堆積し、中層以上に植物遺体が多く含まれる。泥土直上にはすべり面があり地滑りによって墳丘側の滑落土が約1.8ｍの厚さで堆積する。この滑落土は第１～４次調査で検出した滑落土と同様に一辺40cm、厚さ10cm前後の土塊が重なり合ったブロック土が連続したものであり、ブロック間の一部には円筒埴輪や人頭大の礫が認められた。

＜造出＞

調査前の形状は前方部から北へ突出していたが、盛土状況を確認するためのトレンチを入れたところ、地表下4.2ｍで内濠底と造出基底部を検出したことにより、造出状の突出部は地滑りによって移動してきた墳丘の盛土が高まりとなった後、周囲の耕地化によって方形に削出・形成されていたことが判明した。本来の造出は想定よりもやや南側の前方部寄りに位置し、内濠部の現地表下2.9ｍで裾の端部となる。裾の東西幅は約35ｍである。後円部との境は幅約1.5～２ｍの溝状となり、濠底はくびれ部にむかって緩やかに上がる。

遺物としては埴輪のほか、基底部裾にあたる濠底から出土した須恵器と木製品などがある。埴輪はすべてが円筒であった。円筒埴輪は突出部北端から東西に並んだ状態で検出したが、いずれも２次的に移動した盛土中に包含されていたものである。須恵器は杯・甕・器台などが認められるものの、いずれも小片である。木製品は鋤などの掘削具や杭など12点を数える。

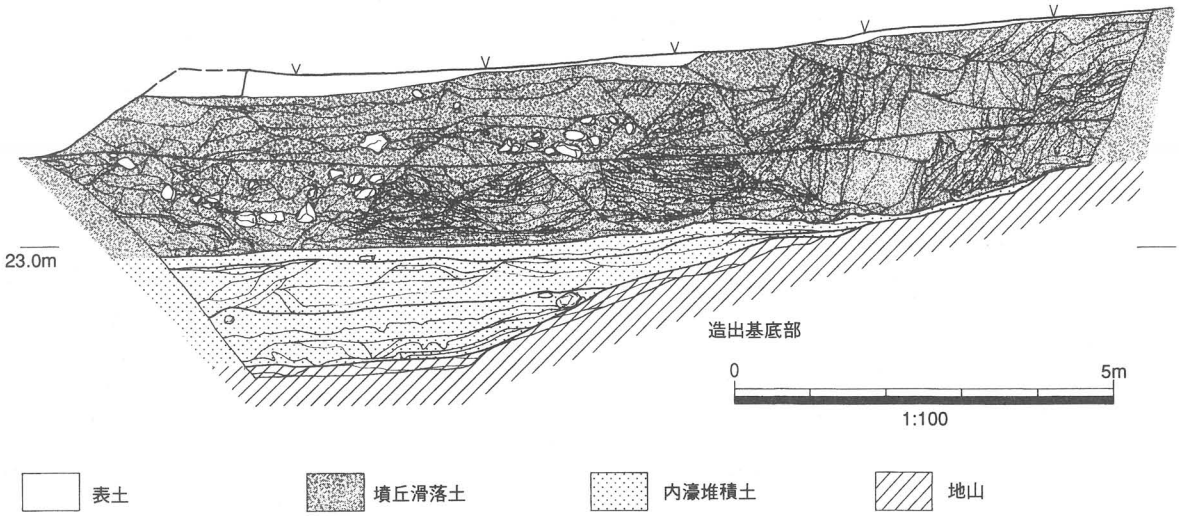


図4　造出基底部土層図

3．まとめ

今回の調査では古墳の規模や構造、祭祀について新たな資料を得た。内堤と張出については築造や盛土の方法が異なっていること、張出上面の東西長が最大65mを測ることが判明した。南北幅については北辺の崩落により明らかでないものの、形象埴輪の配置から見た場合、張出を横断するように配された柵形埴輪列の中央に位置する門形埴輪を中心軸と想定した場合、約10mに復原できる。

埴輪祭祀区は柵形を南北に直列することによって４つの区画が形成されている。この区画を東側から１～４区とし、各区画にみられる形象埴輪の状況を概観する。最も東に位置する１区は東西幅10.5mである。人物が無く、家形とこれに伴う鶏形や器財で構成されている。この区画のみ東西の境界を柵形だけを用いて画しており、門形によって平面的に連なる２～４区とは異なった空間とみることができる。２区は幅7.3mと最も狭い範囲に大刀形、円柱高床式などの建物と鶏、巫女形がなどが配される。３区は想定幅11.0mで最も多くの埴輪が集中する区画である。巫女形や男子座像など祭祀に関わる人物、神殿もしくは祭殿風の円柱式高床建物、大刀、靫、甲冑などの威儀具、水鳥や動物などが配され、本祭祀区の中心的な部分と推察される。最も広い面積を占める４区は東西18m以上をはかる。東端部に円柱高床式の大形建物、中央に武人・力士・鷹匠など、３区の人物群とは異なった職能の集団がまとまり、西半部では馬などの動物を中心とした配列となっている。南を画すように並ぶ水鳥については、検出状況からは４区全体にわたる配置が想定できることから、両者は一連の場面を表現したと解されよう。

各区画にはそれぞれ特徴的な埴輪が配されているが、祭殿風の円柱高床式大形建物が区画毎に１棟ずつ存在することは各場面を再現する上で重要である。

造出については、現況突出部が伏見地震による墳丘の地滑りによる形成であると判明したことは墳丘の形状を復元するうえで重要である。旧来の突出部は墳丘の規模に比して大きく突出した感があったが、今回の調査によって造出本来の位置や形状をうかがううえで具体的な手掛かりを得たといえる。

埴輪祭祀の場についてはこれまで造出と張出の両方で行われたことが想定されてきた。しかし、造出裾部からは形象埴輪がまったく出土しないことから、埴輪祭祀の場が造出から張出へ移行した可能性が高まったといえる。

高槻城二の丸跡及び三の丸跡の調査

西　村　恵　祥

高槻城は芥川の形成した扇状地の末端部に築かれた平城である。ここに本格的な城郭が築かれたのは和田惟政が入城した永禄12年(1569年)以降とみられる。天正年間(1573～1592年)には高山右近が城主となり、城域が拡張され、堀と城壁に囲郭される広大な城に整備された。元和3(1617)年には幕府による本丸・二の丸等の修築、城域の拡張といった大規模な改修が行われ、高石垣と土居がめぐる近世城郭となる。その後、寛永12(1635)年に出丸が増築され、城域の拡張整備は完了した。

しかし、明治7(1874)年には廃城となり破却され、現在では地名や道路などの町割に当時の姿がしのばれるにすぎない。

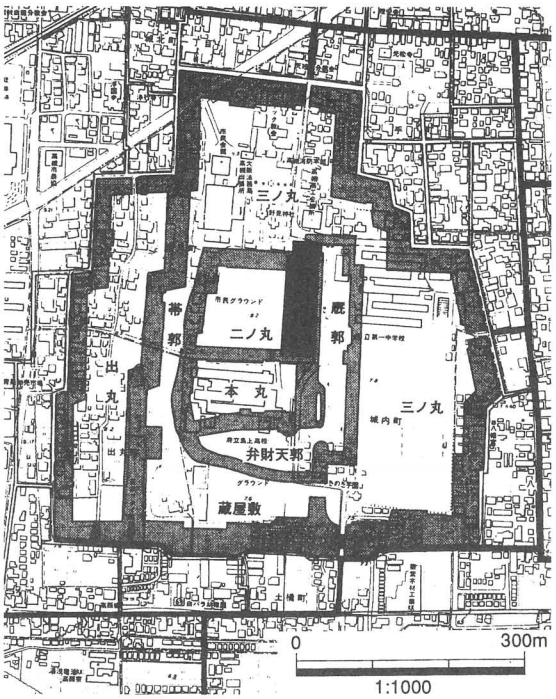


図1　調査位置図

今回の調査は市民プールの解体工事に伴い行ったもので、調査地は高槻城二の丸跡東辺及び三の丸跡北郭地区南東部にあたる。調査は４カ所にトレンチを設定して行った。調査の結果、二の丸跡に設定したＡ・Ｂ・Ｃトレンチでは桝形門の一部や木橋の橋脚、石垣基礎胴木、護岸杭列・横木列等の遺構を、三の丸跡に設定したＤトレンチでは木橋の橋脚、護岸杭列・横木列等の遺構をそれぞれ検出した。以下では絵図等で今回検出した遺構にあたる部分の状況を整理し、次いで各トレンチごとに概要を述べることにする。

Ⅰ．二の丸

１．絵図からみた二の丸

町間入高槻絵図(仏日寺所蔵)によると、二の丸は本丸の北側に位置し、東西63間(124.1m)、南北50間(98.5m)の敷地をもち、城主御殿が建てられていた。南辺を除く三辺は土居が囲み、その上に築地塀が巡らされていた。一方、本丸側の南辺には低い土居があるが、築地塀はみられない。

東辺南部には石垣に囲まれた桝形門があり、橋を介して厩郭へ通じていた。桝形門東側の内堀法面には高さ３間(5.9m)の石垣が積まれていた。桝形門の規模は東西９間(17.7m)、南北10間(19.7m)であり、内堀に面して高麗門、北面に門櫓が設けられていた。また、北西隅部には二層からなる櫓があり、北辺中央部には非常時の出入口となる不明門があり、鍵の字形に石垣が巡っていた。

二の丸を囲む堀は南側で幅13間(25.6m)、その他の部分では12間(23.6m)であり、深さは１間半(3.0m)である。

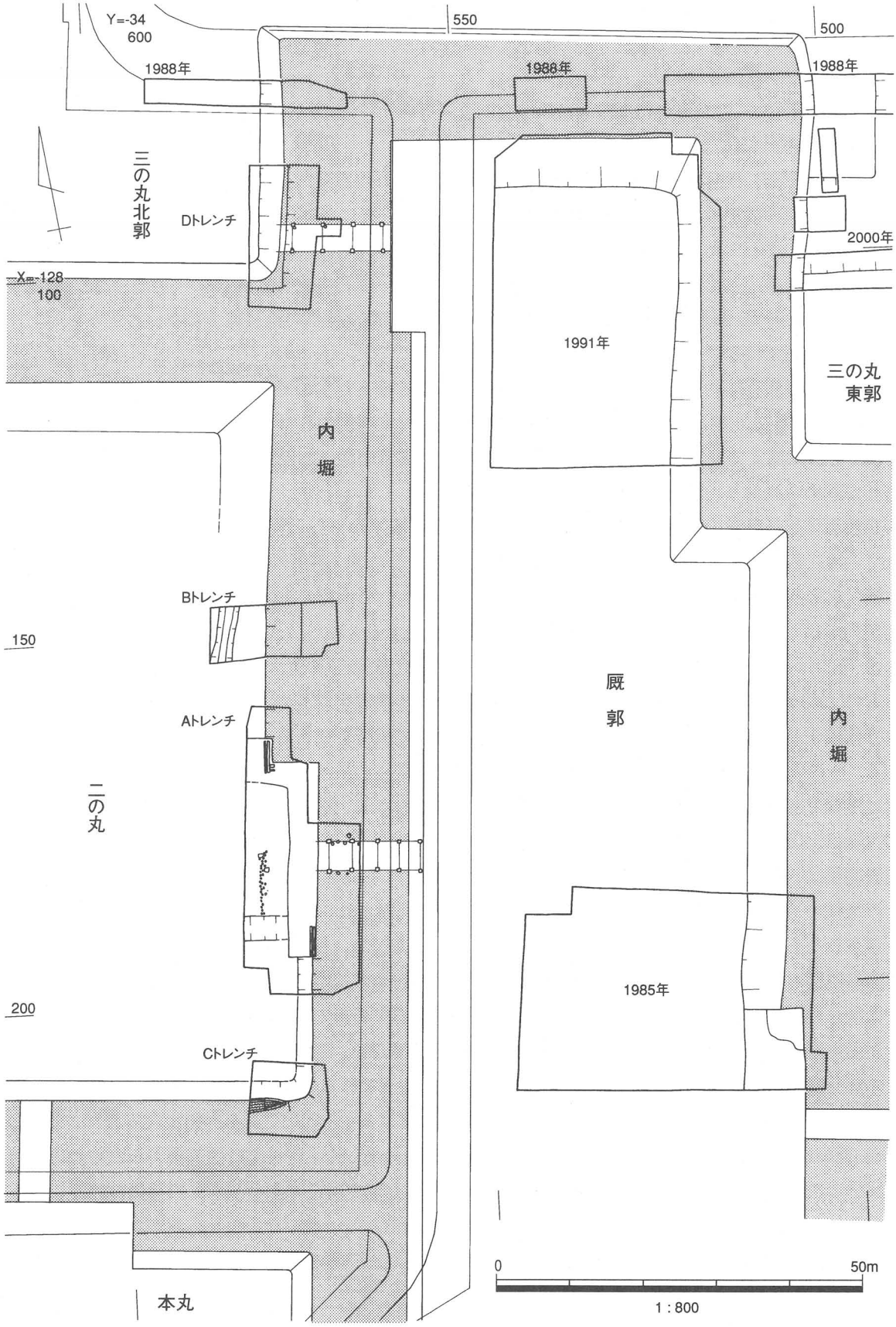


図2　トレンチ配置図と周辺の遺構

2．Aトレンチ（図版第11）

Aトレンチは、二の丸桝形門推定地に設けた調査区であり、桝形門の一部とそこから続く木橋の橋脚、内堀護岸を検出した。

桝形門　桝形門に関連する遺構として、内堀に面して造られた高麗門の門柱礎石、築地地業とみられる遺構および東西溝を検出した。門柱礎石は標高6.62mの位置にあり、一辺52～53cm、厚さ15cmの隅丸方形に近い平石である。築地地業現存部の東側に接して据えられ、しかも後に述べる木橋橋脚南側列の延長線上で検出したことから門柱礎石と推定した。また、礎石の北約２mでも一辺60～70cmの偏平な石を検出したが、築地地業西辺に据えていること、木橋橋脚北側列の延長線上にないことから対となる一連の礎石ではないと思われる。

築地地業は現存幅約1.5mの溝を掘り、基材となる石を据えたものである。検出長は8.6mで、南側は東西溝に接し、北側は削平され残存していなかった。地業西側の石材は一辺30～50cmと比較的大きく、面をほぼ揃えているが、地業東側は残っておらず、築地の幅は不明である。地業内には15～20cmの石が詰められおり、宝筐印塔笠部の破片もあった。

東西溝は築地地業の南側で検出した。幅2.5～3.5m、深さ0.65mで、東側は護岸石垣の掘方で切られている。絵図には桝形門南辺に石垣が描かれており、この溝は石垣の掘方と推定される。

木橋　桝形門の正面の位置で二の丸と厩郭をつなぐ東西方向の木橋の橋脚を検出した。北側列では７本、南側列では４本あり、それらは直径23cmの丸太杭で構成するもの（a）、直径30cmの丸太杭で構成するもの（b）、一辺28～33cmの角杭で構成するもの（c）、直径30cmの丸太の一部を加工した杭で構成するもの（d）、直径35～40cmの丸太の一部を加工した杭で構成するもの（e）に大別できる。aの丸太杭で構成する橋は２本の橋脚からなる長さ4.0mの橋台で橋桁を支えるもので、橋台の間隔は2.6mである。bの丸太杭で構成する橋も２本の橋脚からなり、長さ4.2mの橋台で橋桁を支えるが、橋台の間隔は不明である。cの角杭で構成する橋も２本の橋脚からなり、長さ3.75mの橋台で橋桁を支え、橋台の間隔は3.0mである。dとeの丸太加工杭で構成する橋は対応関係が不明である。それぞれの木橋の前後関係は明確にしがたいが、cの角杭はその他の杭に比べて38～98cm高い位置で切断されており、泥土の堆積の進み具合等を勘案すれば、最も新しいものと判断され、その角杭で構成する橋は廃城時に取り壊されたものと推定される。

石垣基礎胴木　桝形門の正面南端と北東隅部の２カ所で石垣の基礎に敷設された胴木列を検出した。石垣は抜き取られており残存していないが、裏込めの河原石や石垣の破材が検出された。

正面南端の胴木列は標高約3.9mで検出した。幅4.1～4.3m、深さ約2.4mのU字溝を掘り、内堀寄りの部分に胴木を設置しており、堀底からの深さは約1.2mである。胴木は幅28cm、厚さ22～25cmの角材と直径20cmの丸太材を平行に並べたもので、丸太材は角材の13～22cm内側に設置され、また約10cm低い位置に据えられている。底盤には松葉を敷き詰めていた。角材端には連結するための抉り込み部分と杭孔があり、隣り合う胴木端部を重ね合わせ、丸太杭で固定するとともに内堀側の側面に接して杭を打ち固定していた。丸太材は重ね合わせる部分を検出していないため抉り込みがあるかは不明であるが、端から約75cmの位置に杭孔が穿たれており、丸太杭で固定するとともに両側面にも接して杭を打ち固定していた。

北東入隅部の胴木は標高約5.2mにあり、正面南端の胴木と比較すると約1.3m高い位置にある。南北方向の胴木は幅26～27cm、厚さ20～24cmの角材と直径16～20cmの丸太材を平行に並べており、長

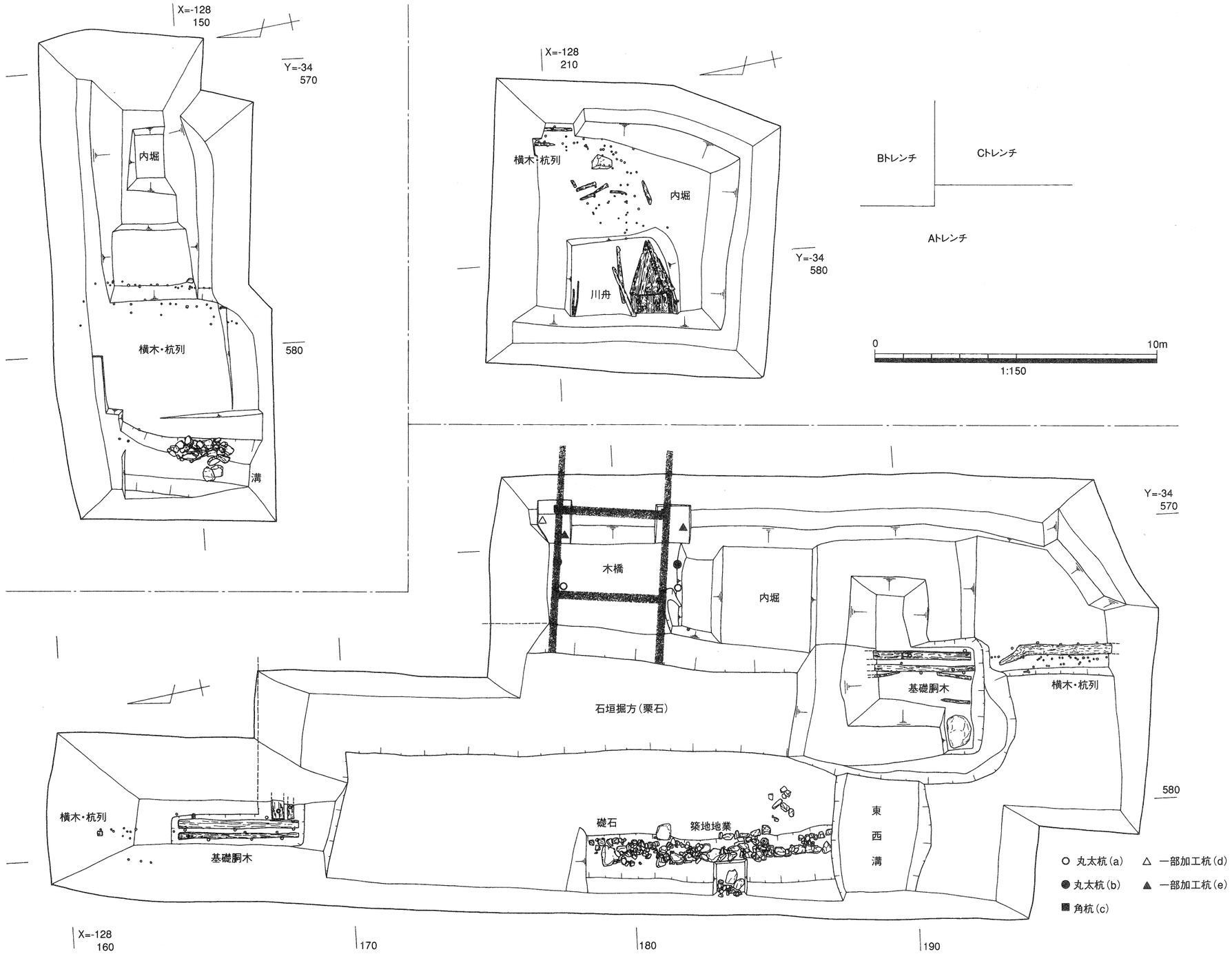


図3　A・B・Cトレンチ平面図

さは4.3mである。丸太材は角材の約10cm低い位置に据えられていた。底盤には正面南端でみられた松葉の敷設はなかった。角材は両側面に打たれた杭で固定されており、丸太材は端から約30cmの位置に穿たれた杭孔と両側面に打たれた杭で固定されていた。南北胴木は検出位置と胴木の長さから櫓門の石垣の基礎部にあたると推定される。東西胴木は南北胴木の角材の南側に接し直交するもので、幅約43cm、厚さ18cmの角材と直径20cmの丸太材を平行に並べている。丸太材は角材の約7cm低い位置に据えられており、底盤には松葉の敷設はなかった。角材は端から約25cm、丸太材は端から約40cmの位置にそれぞれ杭孔が穿たれており、丸太杭で固定されていた。

内堀　桝形門石垣から続く護岸杭列と横木列を確認した。南側の護岸は標高約5.7mで検出し、横木は直径35～37cm、長さ4.15m以上の自然木であり、他地点で検出している横木に比べて太く長い。横木の東側には約70～80cm間隔に直径7～9cmの丸太杭を打って固定している。西側には直径6～7cmの丸太杭を不規則に打っている。北側の護岸では2列の杭列を検出した。西側杭列の杭は35～45cm間隔で揃っているが、東側杭列の杭は間隔が不規則である。また、東側杭列の北端には横木が残存していた。標高はともに6.2mであった。

3．Bトレンチ（図版第12a）

Bトレンチは、市民プールによる削平が少ない部分に設けた調査区である。ここからは、内堀の堀底と護岸、中世末頃と推定される南北溝を検出した。

中世末の溝　検出した溝は上面幅約2.0m、下面幅約0.9m、深さ約1.0mのU字溝である。溝の東肩中央に集石部があり、石灯籠笠部の破材、石仏などが出土した。その他、溝内からは土師器、陶磁器、漆椀、貝殻などが出土した。

内堀　内堀基底部の標高は3.8mであり、傾斜角度は約26度である。水際部分の標高約5.5mでは幅約1.0mにわたり緩斜面になっており、その西側では0.5～0.7m間隔に並ぶ3段の杭列を検出した。杭は直径約6cmの丸太杭である。上段杭列は標高6.3mで検出したが、遺存状態が悪く疎らである。中段杭列は標高6.2m、下段杭列は標高5.7mで検出したが、どちらも間隔は不規則であった。中段杭列の南側には横木が残存していた。堀底から上段杭列までの高さは約2.5mであり、当時の水深と思われる。上段杭列の西側では傾斜角36.5度で立ち上がりがあり、土居につながると考えられる。

4．Cトレンチ（図版第12b）

Cトレンチは、二の丸南東隅部の推定地に設けた調査区であり、内堀護岸を検出した。

内堀　護岸部には杭列があり、トレンチ北端で横木を検出したことから2段であることが判明した。しかし、屈曲部から南辺では杭が不規則に打たれており判然としないが、杭の分布状況から横木は直線的に屈曲するのではなく、弧を描くように曲がるものと推測される。標高5.7mで検出した上段横木は直径約13cmの自然木であり、東側に直径6cmの丸太杭を打ち固定している。また、横木の下部にも丸太杭が打たれていることから修復が行われたことが伺える。標高5.4mで検出した下段横木は直径約14cmの自然木であり、直径8cmの丸太杭を打ち固定している。上下段の比高差は約30cmである。また、弧状に曲がる杭列から中心方向に向けても杭列が検出され、東辺土居と南辺土居を区画すると思われる。トレンチ北西部では厚さ15cmのブロック土による盛土が確認できた。二の丸南辺の土居を築造するにあたり埋め立てを行ったものと推定される。遺物としては、内堀堆積土から川舟の舳先側前半分を検出したのをはじめ、石垣石材、宝筐印塔相輪部、鬼瓦などが出土した。川舟は底部幅1.1mのもので、堀堆積土上面で検出したことから、廃城時に捨て置かれたものと思われる。

Ⅱ．三の丸北郭

1．絵図からみた三の丸北郭

三の丸は外堀に囲まれた城内北側から東側一帯にある郭である。絵図等には記載されていないが便宜的に、二の丸の北側部分を三の丸北郭、厩郭の東側部分を三の丸東郭と呼称している。

三の丸北郭には南寄りに牛頭天王を祀る境内があり、その他の部分には武家屋敷が建ち並ぶ。南張出部東辺には木橋が掛かり、厩郭北西部の桝形門に通じている。また外堀に面する各辺には土居と築地が巡っていた。

2．Dトレンチ（図版第13）

Dトレンチは、三の丸北郭南張出部南東隅の推定地に設けた調査区であり、三の丸北郭と厩郭をつなぐ木橋の橋脚、内堀護岸を検出した。

内堀　三の丸北郭南東隅部の護岸杭列と横木列を検出した。2段からなり、上下段の比高差は約40cmである。上段護岸は隅部で弧を描くように曲がるが、南側面では検出されなかった。横木は直径5～10cm、長さ0.6～2.0mの自然木であり、東側に直径6cmの丸太杭を約40cm間隔に打ち、横木を固定している。

下段護岸は上段護岸とは異なり、隅部で直角に曲がる。東側面の護岸では直径10～20cm、長さ3.2～3.5mの自然木を2段に積み、東側に直径10～15cmの多角形に加工した杭を50～60cm間隔に打ち、横木を固定している。これに対し南側面では同様の自然木ではあるが1段しかなく、固定している杭も直径約6cmの丸太杭であり、間隔も不規則である。こうしたことから東側面と南側面では異なる施工がなされていることがわかる。

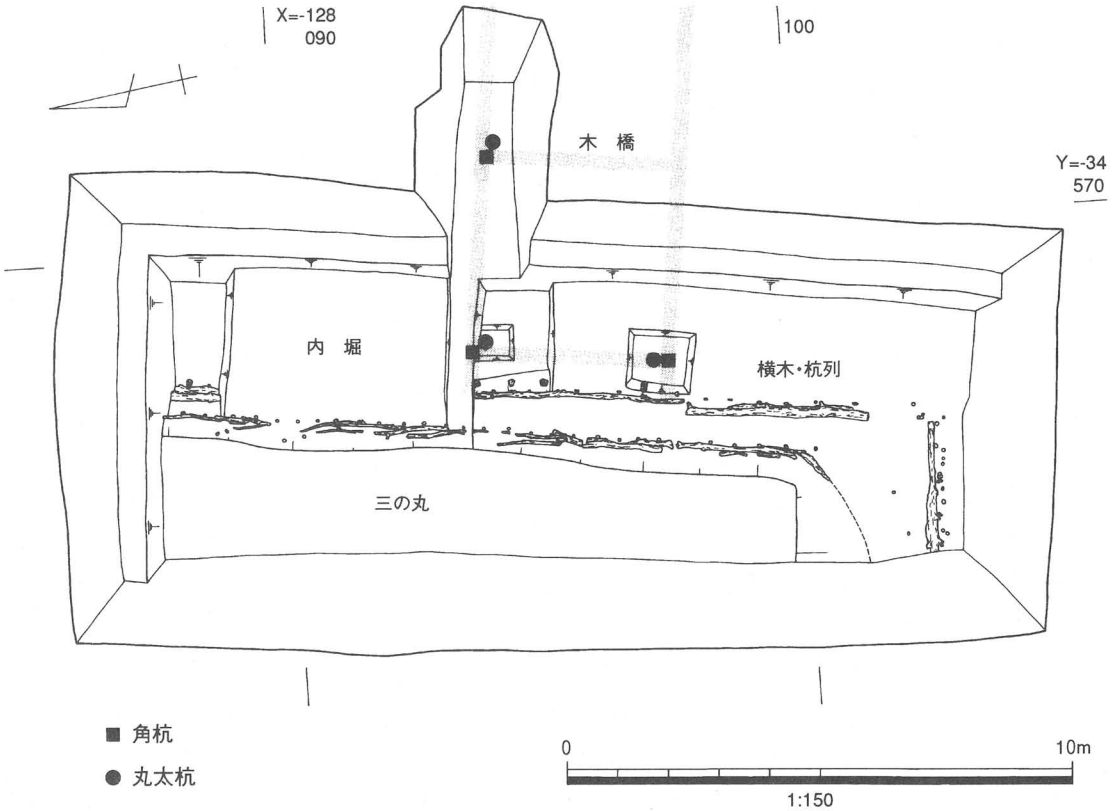


図4　Dトレンチ平面図

木橋　橋脚はすべて先端部を削り尖らせ、堀底に打ち込まれた状態であった。直径20～22cmの丸太杭で構成するものと、一辺24～27cmの角杭で構成するものがある。角杭で構成する橋は２本の橋脚からなる長さ3.75mの橋台で橋桁を支えるもので、橋台の間隔は3.85mである。丸太杭で構成する橋は２本の橋脚からなる長さ3.4mの橋台で橋桁を支え、橋台の間隔は3.95mで検出した。角杭は丸太杭に比べて約57～61cm高い位置で切断されていることから、泥土の堆積がすすんだ新しい時期ものと判断される。

Ⅲ．まとめ

明治７年の高槻城破却時に、石垣石の大部分は鉄道敷設用材として持ち運ばれ、内堀に面して築かれた土居はすべて削平された。その後、跡地は主に軍施設として利用された。終戦後は学校や市民プールの建設などにより城跡の様相は大きく変わってしまったが、地下深くには中・近世の高槻城の遺構が埋もれていることがあらためて確認された。

桝形門　桝形を構成する高麗門は北側の護岸とほぼ一直線上に並び、桝形の門櫓東辺から南側では内堀側へ約６m張り出すことが判明した。桝形門正面の石垣はすべて取り去られているが、基礎に据えられていた胴木は残存していた。胴木は高槻城本丸跡でも検出しているが、今回検出した胴木は本丸跡の胴木に比べて細く、連結部抉り込みの返りが無いこと、脇胴木・跳木が存在しないことなどに構造の違いがある。また、桝形門北側で検出した東西胴木列から南側で検出した東西溝までの距離は約19mであり、絵図に記載されている10間(19.7m)という記載とほぼ一致する。標高を考えてみると、桝形門正面の胴木は3.9mであり、Ｂトレンチで検出した堀底の3.8mとほぼ一致している。

木橋　二の丸及び三の丸で検出した木橋の橋脚はすべて木杭である。そのうち、角杭の橋脚はどちらも相対的に新しく、おそらく廃城時のものと推定される。角杭で構成する橋台の長さは二の丸・三の丸ともに3.75mであり、二の丸では絵図に２間(3.9m)とある記載に合致している。一方、三の丸では法量の記載がないため、今回初めて規模が明らかになった。また二の丸では角杭の橋以前に丸太杭あるいは一部を加工した杭によって構築された橋が存在していたが、これらの橋の規模や時期などの詳細については不明である。

内堀　各トレンチで検出された杭列・横木列の標高は約5.7～6.3mでおおむね一致し、三の丸北郭南張出部東辺と二の丸東辺北半部はほぼ一直線上に並ぶことが判明した。また、Ｂトレンチで確認できた内堀の深さは約2.5mであり、絵図の１間半(約３m)という記載とほぼ一致する。

以上が今回の成果であるが、検出した遺構について、いくつかの課題を指摘しておきたい。まず、Ａトレンチ北側とＢトレンチで検出した護岸杭列の標高は約６.３mであり、ほぼ水際の高さと考えられるが、高麗門の礎石を標高6.6mで検出しており、その比高差はわずか30cmである。内堀の水位と門の地盤との関係としてはあまりにも近似していることから、今回礎石とした石はさらに下部にある根石と考え、門の地盤をより高い位置に想定するのも一案と考えられる。

また、絵図によれば桝形門東側の石垣の高さは３間(約６m)であり、標高に換算すると石垣上面は約9.8mとなる。高麗門礎石との比高差は3.2mであり、門前の張出部には高石垣の存在が推定できる。しかし張出部は約６mだけであり、傾斜面や高石垣上面の築地などを考慮すると、桝形門東辺の築地地業としたものは高石垣地業西辺とも解釈できるかもしれない。これらの課題については今後の調査を期して再考することとしたい。

Ⅱ　しろあと歴史館

高槻市立しろあと歴史館の開館について

1．建設の経過と施設概要（図版第14ａ）

平成11年度の市議会・史跡整備等特別委員会において、市保有の甲冑をはじめとする美術工芸品や古文書等の歴史資料について、適正な保存と公開を図るための施設整備が短期的課題として審議され、建設予定地として高槻城三の丸跡にあたる城内町地内が決定した。

本館設置の目的は、本市の歴史、民俗、美術工芸などに関する資料を収集し、適正に保存するとともに、広く一般に公開して文化の向上に資することにある。そこで建設計画にあたり、立地を踏まえて、常設展示では、近世の高槻をメインテーマに５つのコーナーに分けて、資料や映像・模型などでわかりやすく紹介するほか、企画展示室及び体験学習室では、企画展示や普及啓発活動を行い、歴史や文化、郷土に関する各種講座・教室などを開催し、文化財愛護意識の向上を図り、市民参加の「歴史遺産を活かしたまちづくり」の推進と、歴史文化情報の発信拠点をめざすこととした。また、文化庁並びに東京文化財研究所の指導を得て、指定文化財の収蔵・展示公開も可能な施設・設備を整えることとした。

基本設計及び実施設計は平成12年度におこない、翌13年度に建物本体・設備・電気・植栽関係工事、14年度に展示工事を竣工した。開館式典は平成15年３月28日、一般公開は同３月30日である。

この間、平成13年度には市保有民俗文化財の分類整理調査、平成14年度には市域の文化財掘り起こし調査等を実施し、館の普及啓発と収蔵資料の充実を図りつつ、開館準備をすすめた。

施設概要は、以下のとおりである。

①所在地　　高槻市城内町１番７号　〒569-0075　Tel 072-673-3987　Fax 072-673-3984

②施設規模　　・敷地面積　1,743.86㎡
　　・構造等　　鉄筋コンクリート造３階建
　　・建築面積　1,160.50㎡
　　・延床面積　2,133.54㎡
　　１Ｆ　常設展示室（278㎡）、企画展示室（134㎡）、エントランスホール（218㎡）、事務室（56㎡）、会議室（21㎡）等
　　２Ｆ　第１収蔵室（379㎡）、特別収蔵室（86㎡）、体験学習室（120㎡）、写場（27㎡）、学芸室（45㎡）等
　　３Ｆ　機械室等

③工事期間　　平成13年６月15日～平成15年３月15日

④設計監理　　㈱内藤建築事務所関西支社

⑤施　工　　熊谷・小阪・フエキ共同企業体（建築）、八千代・広沢共同企業体（電気設備）、菱和・ダイプラ共同企業体（機械設備）、㈱丹青社関西支店（展示）

⑥総事業費　　1,142,068千円
　　（内訳）建設工事費951,173千円　展示工事費190,890千円

⑦設備　エレベーター／乗用１基、貨物用１基
電　気／高圧受電、非常用自家用発電機
空　調／空冷ヒートポンプパッケージエアコン方式（館内）、単独蒸気発生装置付空冷パッケージ方式（両収蔵室）
防　災／自動火災報知設備、非常放送設備、窒素ガス消火設備（１Ｆ展示室・２Ｆ両収蔵室）
警　備／開館時間帯・有人常駐警備
閉館時間帯・機械警備（業務系・展示系２ブロックセット管理）

２．館内概要（図版第14ｂ）

（１）１Ｆエントランスホール

ホール中央には、市域の地形模型（10,000分の１、水平垂直比１：1.5）を展示。この地形模型は、市内に点在する数々の遺跡や史跡などを時代別に紹介する映像ソフトと連動して、対応箇所のライトが点滅するなど、市域の歴史遺産を概観できる「歴史ガイド」となっている。また、甲冑・刀剣類の展示や、市民の方々の協力で制作したステンドグラス『ふるさとの彩り』や創作わらべ人形による「大名行列」を展示し、明るく親しみやすいエントランスホールをめざした。常設展示室へは、発掘成果に基づく高槻城本丸石垣基礎の実物大模型を通って入るようにしている。

（２）展示室１（常設展示）

近世（江戸時代）をテーマとして、所蔵資料や掘り起こし調査により寄託・寄贈、並びに借用等を受けた資料と模型やグラフィックなどを駆使し、高槻城をめぐる郷土の歴史について５つのコーナーで紹介。市内のハニワ工場公園などで親しまれている文化財キャラクター・しんちゃん（マンガ家ヨシトミヤスオ氏制作）等が、わかりやすく展示・案内をしている。

①「高槻城と人」

北に西国街道が通り、南に淀川が流れ、京都と大坂の間に位置する高槻の地は多くの人々が行き交う水陸交通の要所であり、この地に築かれた高槻城は、しばしば歴史の表舞台に登場し、江戸時代には西国支配の重要な拠点となった。このコーナーでは、高槻城に関わりの深い歴史上の人物を映像で紹介するとともに、模型（500分の１）で城と城下町を再現。シャチ瓦、唐獅子図屏風、永井直清書状、徳川綱吉黒印状などを展示している。

②「城下町のくらし」

武士や町人らの家屋敷・社寺などが建ち並ぶ城下町と人々のくらしにスポットをあてるこのコーナーでは、高槻城下の一日を芝居仕立てで紹介する立体映像「しろあと座」のほか、三の丸跡出土遺物や武家文書、衣食住関係資料などを展示している。

③「西国街道と芥川宿」

京都と西国を結び、多くの旅人が行き交った西国街道と、街道に置かれた宿駅で本陣をはじめ旅籠屋などが建ち並んでおおいに賑わった芥川宿を、参勤交代の大名行列模型をはじめ、『摂津名所図会』、馬借札、幕末七卿落ち関係資料などによって紹介している。

④「淀川と舟運」

琵琶湖から流れ出て大阪湾に注ぐ淀川は、京都と大坂を軸に人と物資が往来する重要な交通路だった。このコーナーでは、淀川を行き交った三十石船とくらわんか舟の３分の１模型と、府指定無形民俗文化財の「淀川三十石船船唄」の音声解説、くらわんか茶碗、くらわんか舟関係資料などを展示し、淀川と高槻の深い関わりに注目している。

⑤「人々のなりわいといとなみ」

京都・大坂にほど近い高槻ではさまざまな商品生産が行われ、なかでも富田の酒、城山村に代表される寒天、そして素朴な味わいを持つ古曽部焼は、気候や風土に支えられて発展した。ここでは、酒造・寒天製造業関係資料や古曽部焼資料を展示し、高槻の産業の興隆を紹介している。

（３）展示室２（企画展示室）

年間に３～５回、特別展及び企画展を開催予定である。展示ケース外観は展示室１と共通しているが、指定文化財展示も視野に、一部エアタイト仕様としている。

（４）体験学習室

江戸時代の寺子屋をイメージし、床・壁腰板が板張りで暖かみのある空間となっている。ここでは歴史や文化あるいは郷土学習に関する講座・教室の開催を予定し、体験型を基本に子どもたちを中心とした歴史学習の一助になるようカリキュラムを編成していく。

計画予定の講座・教室は、以下のとおりである。

・食の文化―そばづくり・米づくり等
・遊びの文化―竹・紙・藁等を素材とするおもちゃ等
・生活の文化史―近世、近代、現代の移り変わりをわらべ人形づくりを通して学習
・古文書入門、歴史入門、歴史の案内人講座等
・館長講座、夏休み歴史教室、拓本教室、土器づくり、勾玉づくり等

（５）収蔵室（第１収蔵室、特別収蔵室）

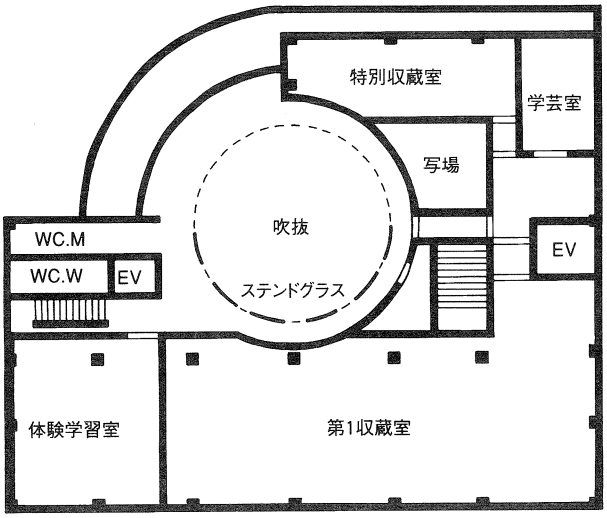
市が所有・保管する歴史、民俗、美術工芸などに関する文化財資料を収蔵する。窒素ガス消火設備や恒温・恒湿空調設備を備え、貴重な文化財を恒久的に適正保存する。

３．開館記念事業

開館を記念して、開館記念特別展「天下統一と高槻～安土城・大坂城そして高槻城～」及び「2003年高槻歴史遊ｉｎｇ歴史ウォーク」を開催した（本書「Ⅲ　文化財保護啓発事業」参照）。

４．利用案内

開館時間	午前10時～午後５時（入館は午後４時30分まで）
休館日	毎週月曜日、祝日の翌日、年末年始
入館料	無料（ただし、特別展は有料）
駐車場	11台



2F

第1収蔵室 (379m²)
特別収蔵室 (86m²)
体験学習室 (120m²)
写　場 (27m²)
学芸室 (45m²)

1F

エントランスホール (218m²)
展示室1［常設展示室］(278m²)
展示室2［企画展示室］(134m²)
事務室 (56m²)
会議室 (21m²)

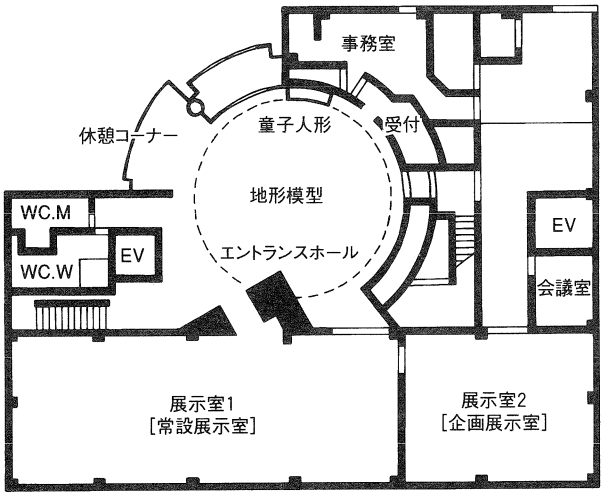
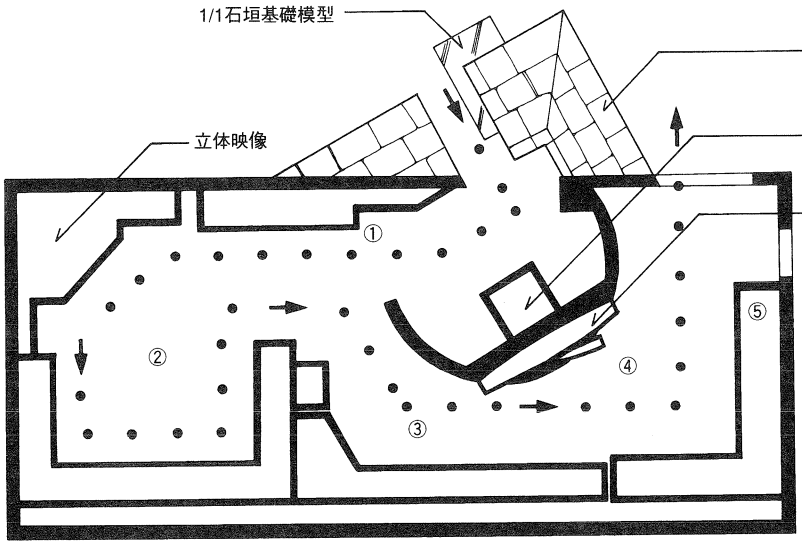


図1　しろあと歴史館1階及び2階平面図



① 「高槻城と人」
② 「城下町のくらし」
③ 「西国街道と芥川宿」
④ 「淀川と舟運」
⑤ 「人々のなりわいと いとなみ」

図2　常設展示の構成

Ⅱ　文化財保護啓発事業

〈平成13年度〉

1．ハニワづくりとスケッチ・ぬり絵大会

日　　程　平成13年５月26日(土)・27日(日)　10時～16時
会　　場　史跡新池ハニワ工場公園
協　　賛　㈱イオン　ジャスコ高槻店
参 加 者　712人
展　　示　ジャスコ高槻店　７月25日～29日　10時～20時（表彰式29日、15時まで）
　　小さな展覧会会場（高槻市生涯学習センター展示ホール）　９月29日～10月４日

2．小さな展覧会

日　　程　平成13年９月29日(土)～10月４日(木)　10時～17時
会　　場　高槻市生涯学習センター展示ホール
内　　容　「いのりのかたち―高槻出土の信仰関係遺物―」と題して、いにしえの人々の「いのり」に焦点をあて、市内出土の信仰に関係する考古資料を精選して展示した。
　　速報コーナーでは、神内遺跡と安満山古墳群の出土品と共に、史跡今城塚古墳第５次調査で出土した人物埴輪や家形埴輪なども展示した。また、ハニワづくりとスケッチ・ぬり絵大会の入賞作品も展示した。
共　　催　高槻市文化振興事業団
入 場 者　3,152人
講 演 会　「庶民信仰の歴史」(平成13年９月30日)
講　　師　狭川真一氏((財)元興寺文化財研究所考古学研究室長)
参 加 者　50人

3．高槻歴史紀行ウォーク・文化財現地公開展

日　　程　平成14年３月10日(日)　９時30分～15時30分
内　　容　市内に点在する史跡などの文化財を、スタンプラリー形式で散策しながら見学する「高槻歴史紀行ウォーク」と、「文化財現地公開展」を、今年度は合同でおこなった。
　　「高槻歴史紀行ウォーク」第３回にあたる今回は、中世に寺内町として発展し、近世には酒造業などが栄え、政治的・文化的に大きな役割を果たした富田界隈を取り上げ、ルート３「寺内町と酒蔵のある街かど」を設定した。寺内町の面影の残る路地や酒蔵を見ながら散策し、真宗寺院本照寺では講演会をおこなった。そして「現地公開展」として、枯山水庭として著名であり国の名勝にも指定されている普門寺庭園と、昭和61年に発見され国の重要文化財に指定された慶瑞寺・木造菩薩坐像を特別公開した。
コ ー ス　スタート：小寺池図書館(受付)→本照寺(講演会)→筒井池公園(昼食)→普門寺(特別公開・スタンプポイント)→慶瑞寺(特別公開・スタンプポイント)
講 演 会　「富田寺内について」

講　　師　日野照正氏（本照寺前住職・文学博士）
参 加 者　162人

4．現地説明会

史跡今城塚古墳第５次確認調査現地説明会
日　　程　平成13年９月23日(日)
参 加 者　6,500人

5．民俗文化財の調査

磐手杜神社
日　　程　平成13年４月21日(土)・５月５日(土)
内　　容　聞き取り調査と祭りの記録
指　　導　原　泰根氏(本市文化財保護審議委員)

市所有の民俗文化財
日　　程　平成13年８月３日(金)～12月１日(土)
内　　容　市所有の民俗文化財4,807点を調査し資料化した
内　　訳　調査点数4,807点のうち
①新たに整理番号を付して資料カードを作成したもの　3,205点
②研究資料・参考資料として分類したもの　288点
③目録を作成した和書　1,314点
指　　導　原　泰根氏(本市文化財保護審議委員)

6．歴史民俗資料館

企画展示
「米作りの道具展」　平成13年２月６日(火)～７月15日(日)
江戸時代の農具と弥生時代の米づくりに関連した安満遺跡出土遺物を展示
「高槻の漁具展」「最近の収集資料展」　平成13年７月24日(火)～12月10日(月)
淀川の淡水魚漁で使われた漁具と最近の収集資料を展示
「高槻の伝統産業・寒天づくり」　平成13年12月18日(火)～平成14年７月14日(日)
高槻でおこなわれていた寒天づくりの紹介と道具の展示
「日本各地のひな人形展」　平成14年２月14日(木)～３月17日(日)
市内在住の収集家の協力により各地のひな人形を展示
講座・教室等
「夏休み親子手作りおもちゃ教室」　平成13年７月22日(日)
講師：宮本順三氏・樋口宇乃氏　参加者：57人
「日中文化の源流を訪ねて～胡弓と民話への誘い～」平成13年12月9日(日)
講師：朱啓高氏・グループまーぶる　参加者：40人

7．淀川三十石船舟唄　全国大会

第９回全国大会を開催した。なお、「淀川三十石船船唄」は平成14年１年29日付けで大阪府指定無形民俗文化財に指定された（本書「Ⅳ　指定文化財」参照）。

日　　程　　平成13年11月23日(祝)　10時～17時
会　　場　　高槻現代劇場中ホール
出 場 者　　235人(うちジュニア19人)
入 場 者　　600人
主　　催　　第９回全国大会実行委員会、高槻市、高槻市教育委員会

8．平成１３年度施設利用状況

施　設　名	見学者数	休　　館　　日	所　在　地
歴 史 民 俗 資 料 館	20,506人	月・祝翌日・年末年始	城内町3－10
埋蔵文化財調査センター	3,052人	土・日・祝・年末年始	南平台五丁目21－1
史跡新池ハニワ工場公園	15,362人	工場館12／29～1／3	上土室一丁目
安　満　宮　山　古　墳	5,518人	公園墓地閉園日	安満御所の町

9．文化財の寄贈・寄託

・寄贈文化財　　７件
　①愛宕地蔵盆祭壇一式等
　②貨幣資料一式
　③高槻城内・城下町絵図写等
　④生活道具（明治～昭和期）
　⑤掛軸・墨書額
　⑥古銭資料一式
　⑦卯花威金小札二枚胴具足・紺糸威胴丸具足
・今城塚古墳外濠から出土した子持勾玉の寄贈を受けた（本書「Ⅵ　資料紹介」参照）。
・本市文化財保護審議委員　原口正三氏から蔵書約10，000冊（発掘調査報告書・考古学歴史学関係図書）の寄贈を受けた。

10．資料等の刊行

速報「史跡今城塚古墳―平成12年度第４次規模確認調査―」
「たかつき文化財地図」
高槻市文化財調査概要ＸＸⅧ「嶋上遺跡群26」

11．文化財資料の貸出・掲載

埋蔵文化財調査センター所管　　50件388点（写真記録類134点、遺物254点）

文化財係所管　　12件12点(写真記録類４点、古文書の掲載８点)

12. 報告書等の受け入れ

図書交換先関係機関等から調査報告書等2,090冊を受納した。

13. 出土遺物保存処理等

津之江南遺跡出土柱根(３年計画の最終年、ＰＥＧ法)

1988年、律令期の大形建物から出土した２点。一辺１mの掘形内に据えられ、直径40cmを越える市域最大級の規模を有する。

安満山古墳群萩之庄支群Ｂ１号墳出土金属製品(アクリル系樹脂強化)

2000年、横穴式石室から出土した銀装大刀など、14点。

安満山古墳群萩之庄支群Ｃ１号墳出土金属製品(アクリル系樹脂強化)

2001年、木棺直葬墳から出土した直刀・剣・たがね・金環など６点。

今城塚古墳内堤埴輪祭祀区出土形象埴輪の復元

第５次規模確認調査で出土した形象埴輪４点(家形２点、巫女形２点)

近世文書の解体検査

14. 文化財等の維持補修等

歴史の散歩路

各コースの説明板・標柱の建て替え(８本)、及び塗り替え(19本)をおこなった。

史跡　新池ハニワ工場公園

２号復元ハニワ工房の茅葺屋根について、挿し茅・叩き直し等をおこなった。また、復元工房の床面補修及び露出展示している18号窯の防カビ処理等を実施した。

15. (仮称)歴史遺物展示館の建設

所蔵する歴史遺物の適正保管・展示のため、展示館の建設工事に着手(平成13年６月15日)し、竣工した(平成14年３月15日)。[展示工事は２か年の継続事業。平成14年度末に「しろあと歴史館」として開館(本書「Ⅱ　しろあと歴史館」参照)]

〈平成14年度〉

1．ハニワづくりとスケッチ・ぬり絵大会

日　　程　　平成14年５月25日(土)・26日(日)　10時～16時
会　　場　　史跡新池ハニワ工場公園
協　　賛　　㈱イオン　ジャスコ高槻店
参 加 者　　820人
展　　示　　ジャスコ高槻店　７月24日～28日　10時～20時(表彰式28日、15時まで)

2．しろあと歴史館開館記念事業

平成15年３月30日にオープンした「しろあと歴史館」(本書「Ⅱ　しろあと歴史館」参照)の開館記念事業として、特別展と歴史ウォークをおこなった。

開館記念特別展「天下統一と高槻～安土城・大坂城そして高槻城～」

日　　程　平成15年３月30日(日)～５月11日(日)

内　　容　激動する戦国時代、天下統一の足固めに大きな役割を担った高槻城と、安土城や大坂城に関する古文書や歴史資料、さらに発掘調査による出土品によって、信長から秀吉、家康にいたる天下統一を概観した。

展 示 品　安土記(滋賀県立安土城考古博物館蔵)、和田惟政書状(岡本家蔵)、高山右近允書状(本山寺蔵)、賤ヶ岳合戦図屏風(大阪城天守閣蔵)、高槻城絵図(仏日寺蔵)、大坂城出土金箔瓦・同陶磁類(大阪市教育委員会蔵)、高槻城キリシタン墓地出土木棺(本市蔵)など

見 学 者　2,812人

2003年高槻歴史遊ｉｎｇ歴史ウォーク

日　　程　平成15年３月30日(日)　９時～16時30分

内　　容　『悠久の三島野をめぐる－摂津・三島の王陵と高槻城を訪ねて』と題し、ＦＭ放送による各講師の現地での解説を聴きながら、市内の史跡・遺跡等を散策した。なおこのイベントは高槻市市制施行60周年記念事業もかねている。

主　　催　歴史ウォーク推進実行委員会(高槻市・同教委・高槻商工会議所・高槻市観光協会・産経新聞社／関西2100委員会)

講　　師　脇田　修氏(大阪大学名誉教授・大阪歴史博物館長)
水野正好氏(奈良大学教授・(財)大阪府文化財センター理事長)
和田　萃氏(京都教育大学教授)
和田晴吾氏(立命館大学教授)

コ ー ス　スタート：高槻市立第四中学校(受付)→今城塚古墳(現地解説：水野・和田晴)→芥川廃寺→嶋上郡衙跡(現地解説：和田萃)→アジャリの森(昼食　臨地講演：脇田・水野)→芥川河川敷公園(現地解説：和田萃)→新川桜公園(現地解説：和田晴)→高槻城跡・城跡公園(現地解説：脇田　トーク：〔進行〕水野　〔パネリスト〕脇田・和田萃・和田晴)→解散→随時見学(しろあと歴史館・歴史民俗資料館・野見神社)

参 加 者　3,200人

3．現地説明会

闘鶏山古墳第１次確認調査現地説明会

日　　程　平成14年６月16日(日)：地元向け
平成14年６月22日(土)23日(日)：一般向け

参 加 者　5,752人

史跡今城塚古墳第６次確認調査現地説明会

日　　程　　平成14年11月30日(土)・12月１日(日)

参 加 者　　6,500人

4．民俗文化財の調査

原　蛇祭り(八阪神社)

日　　程　　平成14年４月６日(土)・４月７日(日)

内　　容　　聞き取り調査と祭りの記録

指　　導　　原　泰根氏(本市文化財保護審議委員)

5．歴史民俗資料館

企画展示

「くらしのなかの"ナベとカマ"」　平成14年７月23日(火)～12月８日(日)

むかしの台所の様子や各種炊飯道具を紹介・展示

「高槻の消防」「郷土玩具の十二支」　平成14年12月17日(火)～平成15年７月13日(日)

昔の消防にかかわる諸道具と、正月・雛祭りの季節にちなんだ郷土玩具を紹介・展示

6．淀川三十石船舟唄　全国大会

第10回全国大会を開催した。

日　　程　　平成14年11月23日(祝)　10時～17時

会　　場　　高槻現代劇場中ホール

出 場 者　　244人(うちジュニア19人)

入 場 者　　600人

主　　催　　第10回全国大会実行委員会、高槻市、高槻市教育委員会

7．平成１４年度施設利用状況

施　設　名	見学者数	休　　館　　日	所　在　地
しろあと歴史館	1,391人	月・祝翌日・年末年始	城内町1−7
歴史民俗資料館	16,584人	月・祝翌日・年末年始	城内町3−10
埋蔵文化財調査センター	1,499人	土・日・祝・年末年始	南平台五丁目21−1
史跡新池ハニワ工場公園	15,359人	工場館12／29～1／3	上土室一丁目
安満宮山古墳	4,074人	公園墓地閉園日	安満御所の町

8．文化財の寄贈・寄託

しろあと歴史館の展示資料の充実をはかるため、文化財の掘り起こし調査を実施し、貴重な資料の

寄贈・寄託があった。

寄贈資料　　20件1,161点

寄託資料　　16件1,745点

9．資料等の刊行

高槻市文化財調査概要ＸＸⅨ「闘鶏山古墳　第１次調査概要報告書」

速報「史跡今城塚古墳　―平成13年度第５次規模確認調査―」

「高槻市立しろあと歴史館常設展示図録」

しろあと歴史館開館記念特別展示図録「天下統一と高槻　～安土城・大坂城そして高槻城～」

高槻市文化財調査概要ＸＸＸ「嶋上遺跡群27」

10. 文化財資料の貸出・掲載

埋蔵文化財調査センター所管　　59件593点（写真記録類307点、遺物286点）

文化財係所管　　２件　３点（写真記録類３点）

11. 報告書等の受け入れ

図書交換先関係機関等から調査報告書等1，898冊を受納した。

12. 出土遺物保存処理等

史跡今城塚古墳ほか市内遺跡出土鉄製品（アクリル系樹脂強化）

史跡今城塚古墳の３～５次調査で出土した鉄小札片などのほか、応急的措置を施し保管中の弁天山Ｃ１号墳・塚原古墳群・紅茸山古墳群出土の鉄製品15点。

史跡今城塚古墳出土の鉄片４点、安満山古墳群萩之庄支群Ｂ２号墳出土鉄刀など２点。

今城塚古墳内堤埴輪祭祀区出土形象埴輪の復元

第６次規模確認調査で出土した形象埴輪５点（家形２点、巫女形１点、柵形２点）。

高槻城絵馬（野見神社蔵）の保存処理

しろあと歴史館開館記念特別展に出品するため、絵馬表面の清掃・ニカワ散布で応急措置を実施した。

13. 文化財等の維持補修等

史跡新池ハニワ工場公園

１号復元ハニワ工房の茅葺屋根について、挿し茅・叩き直し等をおこなった。また、野外展示場の復元キヌガサ形埴輪の立ち飾り部について取り替え修復をおこなった。

安満宮山古墳

墓壙レプリカについて、継ぎ目の樹脂更新や彩色等の修復を実施した。

史跡嶋上郡衙跡附寺跡仮整備地

郡庁院を表示した北区と館舎群の南区を結ぶ木橋の修繕と、退色がみられた説明板を取り替え設置した。

Ⅳ　指定文化財

1．文化財の指定

(1) 大阪府指定天然記念物の指定（図版第16ａ）

出灰素戔嗚神社境内にそびえる巨樹・カツラが大阪府指定天然記念物に指定された。

平成14年１月29日付　大阪府教育委員会告示第４号

名　　称　　出灰素戔嗚神社のカツラ

員　　数　　１本

所 在 地　　高槻市大字出灰小字堂の前

所 有 者　　宗教法人素戔嗚神社

説　　明　　出灰素戔嗚神社のカツラは、芥川の最上流にあたる流谷川左岸の標高280mの地点、素戔嗚神社の鳥居の東側に立っている。

せせらぎのそばにあるこのカツラは、根本から大中小10本の幹が相接して株立状にそびえている。中心になる幹は幹周3.5mの古木であるが、幹の集合体としての幹周は8.0mを測り、樹高が28.7mの巨樹である。樹形は、枝張りが東へ8.0m、西へ8.3m、南へ6.2m、北へ6.3mと散開して華麗な姿を示している。また、カツラに接して幹周1.6mのウラジロガシ、カヤが生育している。

なお、素戔嗚神社は、素戔嗚尊を祭神とし、創建年代は本殿前にある灯籠に刻まれた年号からすると元禄年間（1688～1704年）までさかのぼることができる。出灰素戔嗚神社のカツラは古くから御神木として保護されてきたことが窺われる。

カツラは冷温帯の落葉広葉樹で、大阪府下では高槻市出灰と能勢町山辺の山間地域に自生していることが知られているだけである。

出灰素戔嗚神社のカツラは、素戔嗚神社とほぼ同じ古さの樹齢を数える巨樹であり、府下では珍しい樹木であることから、大阪府指定天然記念物にふさわしいと考えられる。

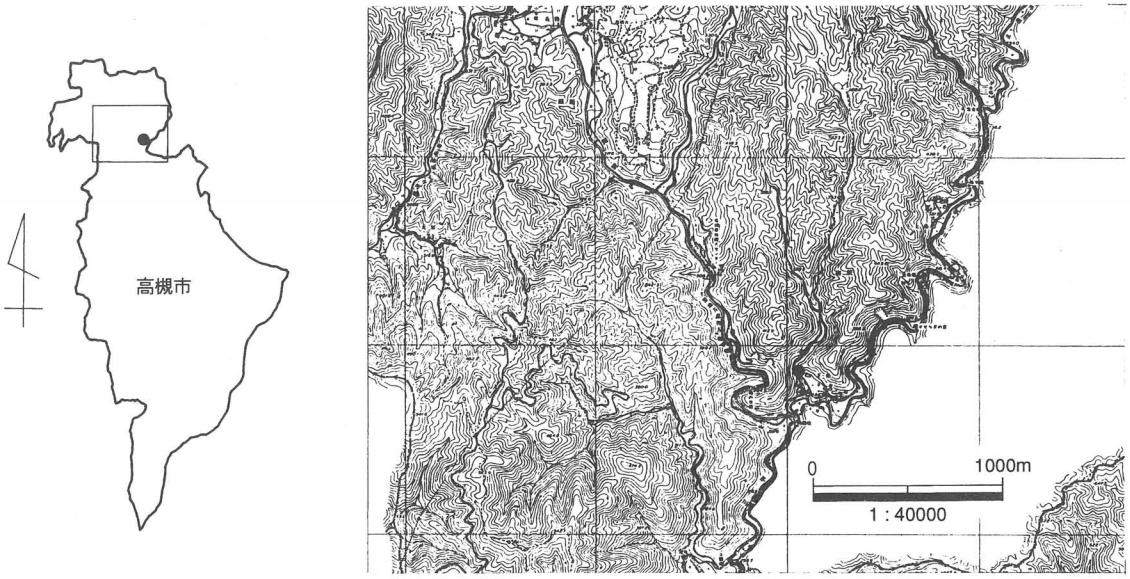


図1　出灰素戔嗚神社のカツラ所在地

(2) 大阪府指定無形民俗文化財の指定

高槻市指定無形民俗文化財である「淀川三十石船船唄」が、大阪府指定無形民俗文化財に指定された。

平成14年1月29日付　大阪府教育委員会告示第4号

名　　称　　淀川三十石船船唄

所 在 地　　高槻市大塚町

保護団体名　　淀川三十石船船唄大塚保存会

説　　明　　淀川三十石船船唄は江戸時代中頃から明治時代中頃まで、京都（伏見）と大阪（天満）までの約11里（約44km）の淀川を上り下りしていた淀川三十石船の船頭衆によって唄われていた船頭唄であり、全国でも数少ない船唄（船頭唄）の一つである。

淀川は古くから重要な交通路であり、中世末から産業の発達に伴って行き交う船も多くなり、天正年間（1573～1592）には三十石船が出現した。一般に淀川三十石船といわれているのは「早登り三十石」「人乗（ひとのせ）三十石」などといわれる全長約11～15m、幅約1.8～2.1mの吃水の浅い苫船で、旅客運送を主としていた。

この三十石船の船頭衆は、京都から大阪に下る間に、都々逸調の七七七五の音数で、流れに沿って朗々と、両岸の風情を多様に唄いあげた。旅人はこの唄によって旅情をなぐさめられながら、船がどのあたりにいるかを知ることができたといわれる。この三十石船の風情は、浪曲の「森の石松三十石船」や上方落語の「三十石船船下り」、さらには十返舎一九の「東海道中膝栗毛」のなかに紹介されている。

ところが、淀川名物とうたわれ、天保14年（1843）には171艘もあった三十石船も、明治2年に外輪蒸気船が現れると次第に減りはじめ、明治43年の京阪電車の開通で完全に姿を消してしまった。

高槻市大塚地区では明治時代になって、川下りや遊覧船の船頭に従事するものが現れ、三十石船船唄を伝承してきた。それらの船頭の一人に、奥野久吉氏（昭和18年9月没）がおり、氏は江州音頭などの民謡の名人であり、船唄も得意としていた。

奥野氏は息子市川九平次氏（昭和56年12月没）に船唄を伝えたが、市川氏は唄を永く保存するために、昭和39年に大塚地区の人々とともに「淀川三十石船船唄大塚保存会」を結成した。

この保存会は船唄の唯一の保存団体として、一貫して市川氏の指導を受け、氏の死後も船唄の普及・公演等の活動を続けてきた。高槻市は昭和60年に「淀川三十石船船唄大塚保存会」を保持者として「淀川三十石船船唄」を無形民俗文化財に指定し、現在に至っている。

江戸時代から明治時代にかけて、京都・大阪間の重要な交通・運輸方法として活躍した淀川三十石船とともにあった船唄は、大阪を代表する民謡のひとつであり、府下に残る数少ない労働歌としても貴重である。

(3) 史跡の指定

平成13年度の試掘調査、平成14年度の確認調査により、未盗掘の竪穴式石室2基が存在することが判明した闘鶏山古墳が史跡に指定された。

平成14年12月19日付　文部科学省告示第202号

名　　称　　史跡　闘鶏山古墳

所 在 地　　大阪府高槻市

氷室町六丁目1番３、1番40、

1番47、1番88、1番89

上土室二丁目1番35のうち実測130.74m^2、

4番３

指定理由　　大阪府北部の淀川流域を見下ろす丘陵尾根部に立地する全長86.4mの前期前方後円墳。２基の埋葬施設は竪穴式石室であり、盗掘を受けておらず、木棺や副葬された鏡や石製腕輪などの保存状況も良好である。当時の埋葬儀礼や北摂地方における政治情勢を知る上で重要である。

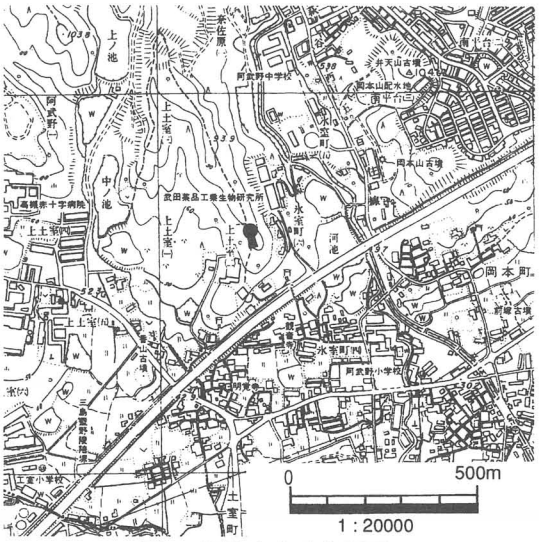


図1　闘鶏山古墳位置図

図2　闘鶏山古墳史跡指定範囲

V　資料紹介

今城塚古墳外濠採集の子持勾玉

西　村　恵　祥

はじめに

今回、紹介する子持勾玉は平成14年１月に史跡今城塚古墳外濠北東部で採集されたものである。子持勾玉は市内では初例であり、発掘資料ではないものの重要な遺物であることから、ここに紹介することにした。

今城塚古墳の外濠は、池や旧耕作地の区画として残存しており、規模・形状などその概略を知ることができるが、北側についてはすでに削平されてしまっている（本書Ｉ－２「調査の概要」参照）。とくに北東部においては、旧耕作地が北側に不定形に張り出しており、外濠の範囲は明確ではない。勾玉が採集された地点は、この北東部の張り出した部分の一画にあたる（図１）。

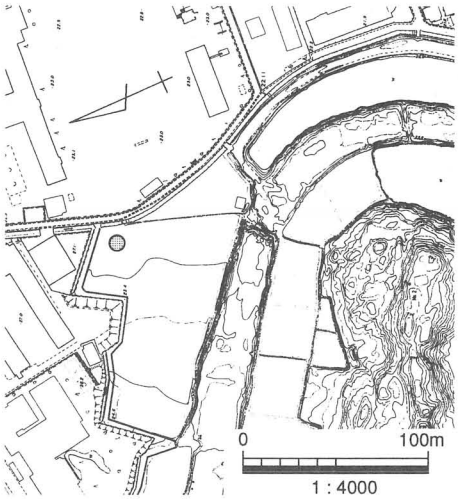


図1　子持勾玉採集位置

なお、この子持勾玉は、発見者のご厚意により平成14年１月15日に高槻市教育委員会に寄贈された。

形　状　（図版第16ｂ）

長さ9.4cm、幅5.8cm、厚さ3.4cm、重さ168g。艶のある滑石製で、黒縞、黒斑点混じりの緑灰色を呈する。頭部及び尾部の一部が欠損している。外表面には幅２ｍｍ程の加工痕が多数残存している。

親勾玉の頭部中央に径4mmの孔が穿たれている。穿孔は両面からの錐によるもので、中央部で貫通している。親勾玉の腹部の幅は3.5cm、厚さは2.1～2.3cm、断面形は長楕円形である。

親勾玉の腹部には１個、背部には４個、左脇腹には３個の子勾玉が作り出され、左脇腹の勾玉の下部にはさらに１個の突起がみられるが、意図的に削り取られている。右脇腹にも子勾玉を表現するとみられる突起が７個作り出されている。

腹部の子勾玉は、他のものに比べて大きく、長さ2.8cm、幅0.9cm、厚さ1.3cmを測る。背部の４個の子勾玉は、独立せずに、連続している。それぞれの寸法は上が長さ2.0cm、幅0.6cm、厚さ0.8cm、２番目が長さ1.8cm、幅0.7cm、厚さ0.9cm、３番目が長さ1.5cm、幅0.8cm、厚さ1.0cm、下が長さ1.8cm、幅0.9cm、厚さ1.0cmを測る。

左脇腹の３個の子勾玉は、親勾玉の弧状ラインに沿って、腹部から0.7cmのところに連続して作り出されている。各勾玉の寸法は、上が長さ1.4cm、幅0.6cm、厚さ0.3cm、中央が長さ1.2cm、幅0.9cm、厚さ0.3cm、下が長さ1.4cm、幅0.9cm、厚さ0.3cm測る。さらに下部には長さ1.0cm、幅0.8cmの突起の痕跡が残っており、ある時期に意図的に削り取られたとみられる。

これに対して右脇腹の７個の突起は、２個で１対となる子勾玉の表現はされていない。親勾玉の腹部の弧状ラインに沿うようにして、腹部から0.7cmのところに連続して作り出されている。突起の幅は

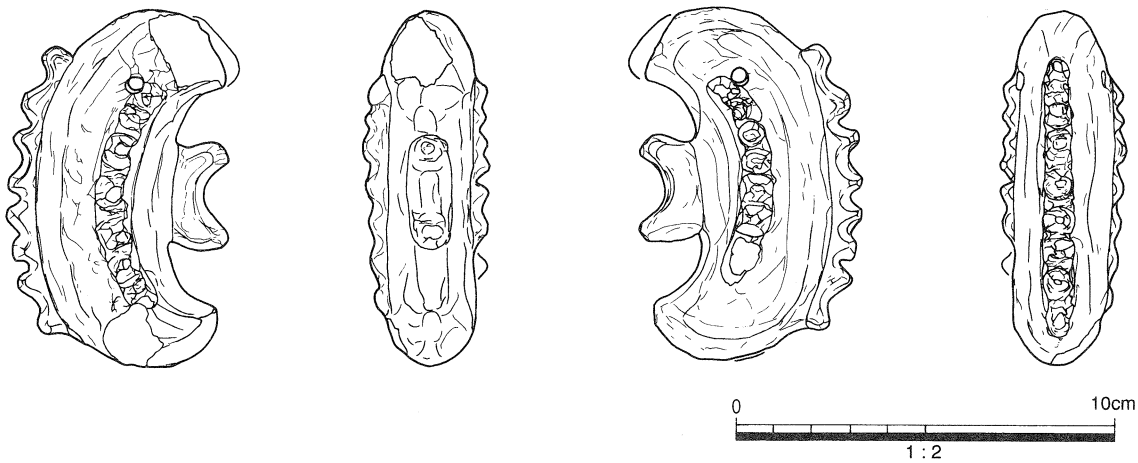


図2　子持勾玉実測図

0.7cm、厚さ0.2cmで同じであるが、上部の2個と下部の1個は、長さ0.6cm、と小さく、中央の3個は、長さ0.9cmと長い。

こうしたことから脇腹では、当初7個の突起を削り出し、子勾玉の成形の段階で、左脇腹においては下部の突起を1つ削り取り、突起2個ごとに深く抉ることで1個の勾玉を表現し、合計3個の勾玉を作り出している。右脇腹では、突起の状態のままであり、子勾玉の成形がなされずに製品になったものと推測される。

時　期

採集品であり、他に共伴する遺物がないことから明確にしえないが、大平茂氏のⅢ型式B－2類にあたることから、6世紀前葉と推定される。(註1)

まとめ

採集地点が今城塚古墳外濠北東部であり、時期的にも今城塚古墳に伴う遺物である可能性が高い。しかし、採集地点の北側には5世紀後半の狐塚古墳群（註2）があり、北東には5世紀中頃から6世紀初頭の掛塚古墳群（註3）もあることから、そうした周辺の古墳の遺物ともみられるが、本例のような大振りの子持勾玉については、小玉等の他の滑石製品とともに大形古墳築造時の地鎮の祭祀に用いられることがしばしばで、原位置は不明というものの、本来的には今城塚古墳の祭祀に供されていたものとみられる。

註1　大平茂　「子持勾玉年代考」『古文化談叢』第21集　九州古文化研究会　1989年12月

註2　「狐塚古墳群」『昭和50年度　高槻市文化財年報』　高槻市教育委員会　1976年3月

註3　高橋公一　「嶋上郡衙跡（42－A地区）の調査」『嶋上遺跡群19』　高槻市教育委員会　1995年3月

Ⅵ 報 告

岡本山古墳測量調査

高 橋 公 一

淀川北岸地域において最大の規模を誇る三島古墳群。このうち南平台三丁目に所在する岡本山古墳は、3世紀後半に築造された三島地域の王墓と考えられ、郷土の豊かな歴史を物語る文化財として特に重要である。古墳の大半は周辺の市街化がすすむなかで山林として旧状をとどめているとみられ、形状並びに遺存状況を明らかにするため、土地所有者のご理解を得て、平成14年度国庫補助事業として測量調査を実施した。

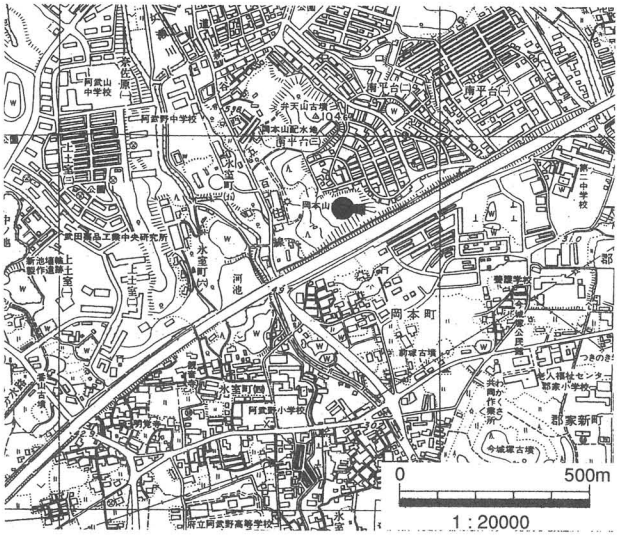


図1 岡本山古墳位置図

岡本山古墳は、1960年に名神高速道路工事に伴う事前調査として、大阪府教育委員会により墳丘の測量と前方部の調査がおこなわれた。この調査により、全長120m、後円部径70m、前方部幅60m、後円部の高さは約11m、前方部との比高差は約5mであること、そして前方部は三段に築成され、各段の平坦部幅は約0.7mで、斜面と同様にこの平坦部にも葺石が存在することが明らかとなり、これまでの基礎資料となっている。また、埴輪の存在が確認できない反面、土師器壷破片が採取され、前方部南側斜面中段付近では鉄斧が出土している。一方、南側くびれ部付近に位置する直径約20mの円丘状の高まりについても調査をおこなったが、埋葬施設等は発見できなかった。

以後40余年、名神高速道路によって前方部前端部分が削平された以外、大部分は旧状のままとみられるが、現時点での形状把握が必要と判断し、測量調査を実施した。

調査は委託事業として実施した。まず古墳本体と周辺部において、倒木の処理および必要最小限の伐採作業をおこない、トータルステーションと電子レベルを使用し、縮尺1／100、等高線間隔25cmで図化した。そして、これを原図として編集し、縮尺1／200地形図を作成した。

今回の測量調査によって岡本山古墳の形状を詳細に把握することが可能となった。以下に現時点での成果を列記し、作成した地形図の縮小版（縮尺1／700）を掲載する。

1．後円部の直径は約74m、頂部の標高は92.4mを測る。

2．前方部上面は標高86.3mの平坦面となり、前端方向に向かってスロープ状に緩やかに上る。

3．名神高速道路による前方部前端部分の削平及び改変部分が明確になった。

〈謝　　辞〉測量にあたり立命館大学教授　和田晴吾氏にご指導を賜りました。記して感謝いたします。

〈参考文献〉小林行雄「岡本山古墳の調査」『大阪府の文化財』大阪府教育委員会　1962年
原口正三「弁天山古墳群」『高槻市史　第6巻　考古編』高槻市役所　1973年

図2　岡本山古墳地形測量図

月見町所在「真上窯跡」の発見

平成14年夏、近世の窯跡を新たに確認したことから、発見の概略を報告する。

所在地は高槻市月見町30番地にあたり、北側から延びた尾根(慈願寺山)の裾に近い西南斜面に位置し、現状は山林である。

直接の発見は、市内在住の陶芸家　寒川義崇氏による。氏が永楽保全の窯の所在を探求するなかで、窯の所在地とされる当該地を地権者の了解を得て分布調査を実施したところ、焼成する際に製品を入れる匣（サヤ）や、窯体の一部が出土した（4月)。市教委文化財課はこれを受けて、寒川氏と土地所有者の田中勝氏とともに現地を視察し、匣の破片に実際に焼成した痕跡があること、傾斜地に面して作業場に使える平地があり、窯を構えるのに良好な土地形状を呈することから、近世の窯跡と判断された（8月15日)。

図1　真上窯跡と近世窯関連遺跡

当該地付近は、『郷土高槻』(高槻市文化研究会編1951年）や『高槻通史』(天坊幸彦著1953年）では、保全の窯跡の所在地と記されている。

永楽保全（1795～1854）は、江戸時代末期を代表する京焼の名工で、紀州徳川家の御庭焼に出仕して永楽印を拝領した。高槻には1852年5月頃から数カ月滞在しており、その際にひらいた窯が、今回発見の窯ではないかと推定された。寒川氏によれば、「真上」の地名が記された保全の作品もみられることも、その傍証の一つとされる。

一方、保全の窯は高槻城内北東部に築かれたとする見解もあり、城の北東に位置する三の丸跡の発掘調査で匣や窯壁が出土していることから、城内三の丸で築窯したとする指摘もある（高槻城跡遺跡調査会『高槻城三ノ丸跡発掘調査概要報告書』　1987年)。また、近世において市内には地方産業である古曽部焼が起こり、当該地のような丘陵裾部には、その試作段階の窯が埋没しているとみられ、この窯もそれらのうちの一つであるとも考えられる。

現時点では保全の窯とは確定できないものの、郷土の歴史と文化を語る貴重な文化財であり、窯跡を中心とする当該地一帯を周知の遺跡として大阪府に遺跡発見の届出書が提出されたものである。なお名称については、大字名である「真上」を冠するのが最適と判断し、関係者と協議のうえ、「真上窯跡」とした。

図　　版

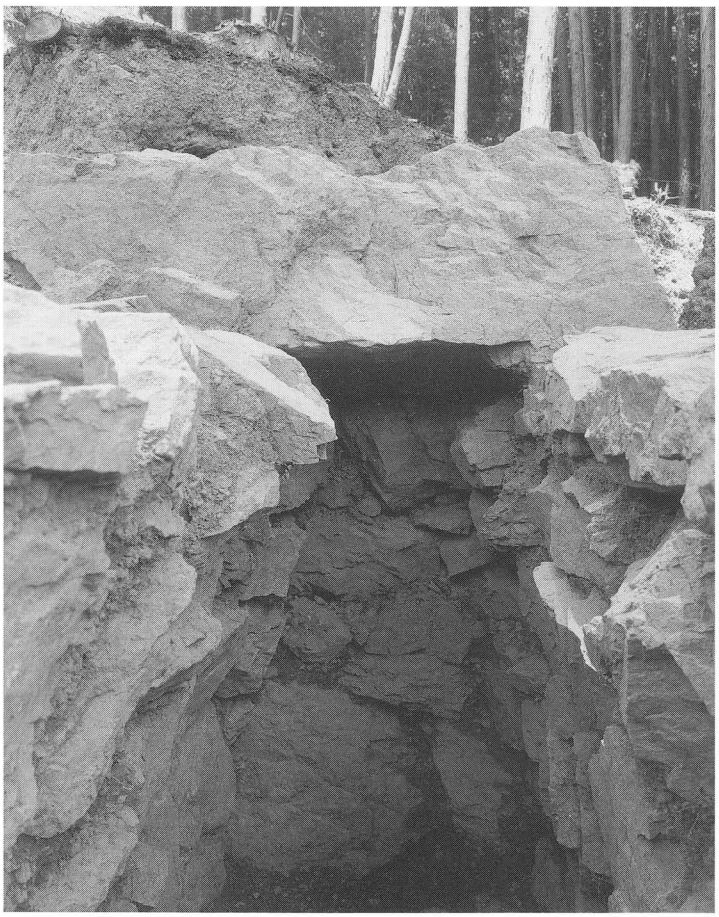
a．安満山古墳群萩之庄支群B2号墳　全景（南側から）

b．安満山古墳群萩之庄支群B2号墳　石室全景（南東側から）

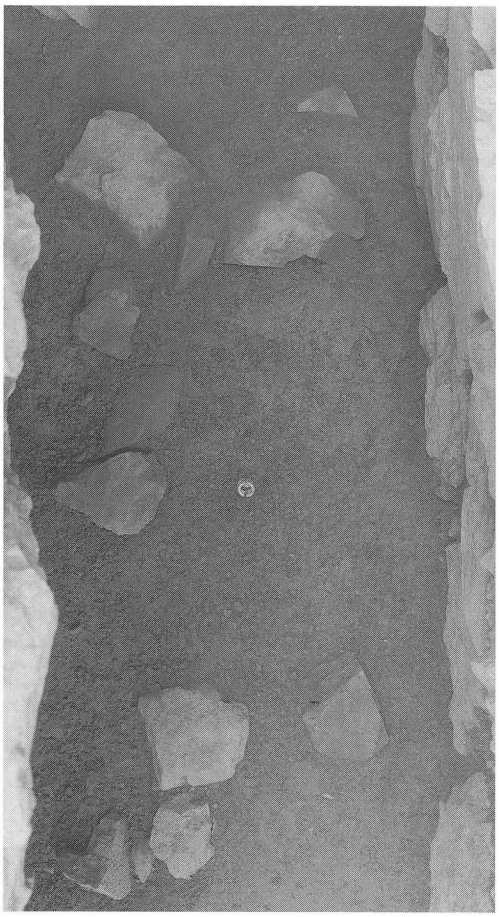
a. 安満山古墳群
萩之庄支群Ｂ２号墳
石室奥壁
（玄室［南］側から）

b. 安満山古墳群萩之庄支群B2号墳　石室床面検出状況（羨道［南］側から）

a. 安満山古墳群萩之庄支群B3号墳　石室全景（南東側から）



b. 安満山古墳群萩之庄支群B3号墳
石室奥壁と天井石（南側から）



c. 安満山古墳群萩之庄支群B3号墳
石室内金環出土状況（写真天が北）

a．安満山古墳群萩之庄支群B4号墳　石室全景（南側から）

b．安満山古墳群萩之庄支群B4号墳　石室内遺物出土状況（奥壁［北］側から）

a．安満山古墳群萩之庄支群B4号墳　石室内小区画（東側から）

b．安満山古墳群萩之庄支群B4号墳　全景［後方斜面にB4号墳が開口している］（南側から）

a．今城塚古墳第5次規模確認調査　内堤埴輪祭祀区（西側から）

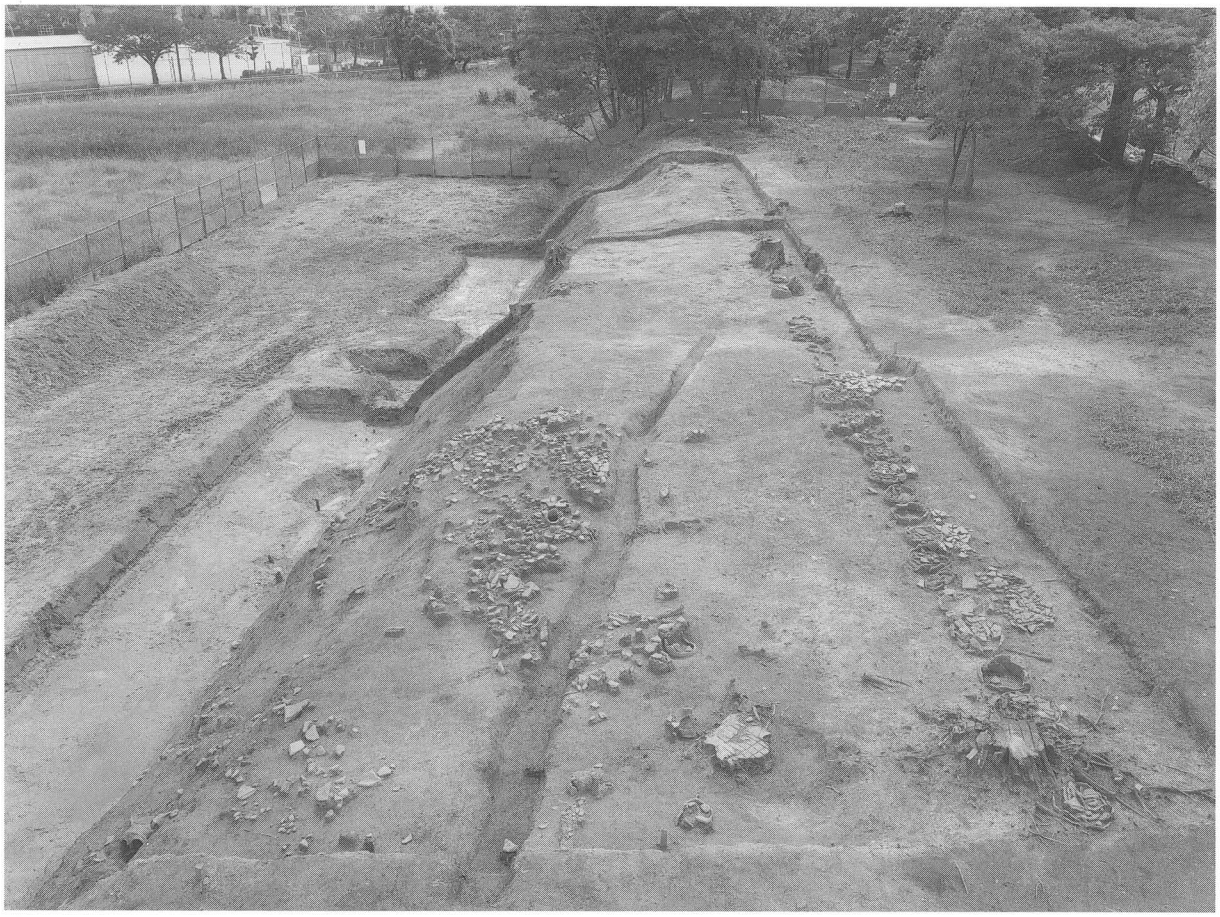
b．今城塚古墳第5次規模確認調査　人物埴輪群出土状況（西側から）

a. 今城塚古墳
第5次規模確認調査
柵形埴輪・大刀形埴輪
検出状況（南側から）

b. 今城塚古墳第5次規模確認調査　家形埴輪検出状況（北側から）

a．今城塚古墳第6次規模確認調査　空中写真（北東側から）

b．今城塚古墳第6次規模確認調査　北側造出検出状況（北側から）



a. 今城塚古墳第6次規模確認調査　内堤埴輪祭祀区東半部（西側から）

b. 今城塚古墳第6次規模確認調査　内堤埴輪祭祀区西半部（東側から）

a．今城塚古墳第6次規模確認調査　内堤断割状況（北西側から）

b．今城塚古墳第6次規模確認調査　内濠埋土状況（南西側から）

a. 高槻城二の丸跡　Aトレンチ全景（南東側から）

b. 高槻城二の丸跡　Aトレンチ　木橋・築地地業検出状況（東側から）

a．高槻城二の丸跡　Bトレンチ　内堀検出状況（北東側から）

b．高槻城二の丸跡　Cトレンチ　内堀護岸検出状況（南側から）